

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
 昭和四十一年十月十五日 印刷
 昭和四十一年十一月一日発行 (毎月一日発行)
 (第一四号)



No. 14

十一月号



えらばれ

みがきぬかれた 灘の酒

超特撰 日本盛



超特撰 (化粧ケース入)
一ハリツトル詰・一〇〇円

清酒

日本盛

ニホンサカリ

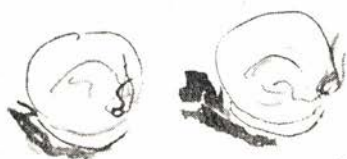
灘 西宮酒造 醸



大阪文化祭才18回川柳大会

文化の秋を飾る大阪文化祭川柳大会は、ことしも次のとおり開催いたします。
初心者の方も気軽に作品をお寄せ下さい。また、大会へは、どなたでも応募の
有無にかかわらず、ご来場下さるようご案内いたします。

日時	会場	開会の辞	講演	兼題	席題	閉会の辞	投句	締切	宛先	賞	句集	主催
昭和41年11月20日(日)	中央公会堂(3階集会室)	司会 西尾 栗	作家 秋田 実	「赤電話」 生島 鳥語選 「遊」 岡橋 宣介選 「ベトナム」 片山 雲雀選 「祭」 中島 生々庵選 「ハイウェイ」 堀口 塊人選	当日2題発表(1時30分しめきり)	西田 柳宏子	各題ごとにハガキ1枚に2句ずつ 住所・氏名・雅号を明記	11月10日 着限	北区中之島1 大阪市教育委員会内 大阪文化祭川柳大会係	席題・兼題共優秀句に、府知事・大阪市長・大阪府・市教育委員長から贈呈	入選句集をご希望の方は投句の際 一〇〇円添付	大阪府・大阪市・大阪府教育委員会 大阪市教育委員会



ち

9月11日弓削の西日本川柳大会に出席した。これまで七八回参会したが、いつも時間の都合で果せなかった念願が叶うて誕生寺に参詣できた。7百年の樹齡を誇る公孫樹や桃山調の本堂。初秋の早朝であったせいもあってか如何にも寂然たるものがある。勢至丸、後の源空、後の法然が長承2年4月7日生れた場所である。産湯の井と称せられる泉の水も静かにすがすがしい。この美作国に誕生、80才で京の東山大谷で寂。その間大きな苦惱

の中に念仏浄土門を拓めた「いのち」の厳しさ
にうたれながら私は思つた。法然は80、親鸞
は90、その生涯は宇宙の永遠性絶対性から見
れば極めて微力で無にひとしい存在である。
然るにその叡智の「いのち」すみきった人間
愛の眼は永遠に後世の人の血脈に宿り伝つて
ゆくのである。いみじくもこの誕生寺から4
キロの場所に17年前から路郎先生の「おれに
似よ」の句碑がたてられてあるのである。こ
としの弓削はいろいろと考えさせられた。

前号訂正「余命十年、三千六百五十日」

キヤラメルで敬老される日のまぶし
一里塚敬老の日の一万歩

妻の知恵借りて香典の額をきめ

猫蹴つただけで気がすむ無表情

ほんとうの気持ちを読めぬチヨコを受け

中島生々庵

川柳塔十一月号

川柳塔十一月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことばと句帖

中島生々庵 (1)

はたらくうた

(20)

― 同人特集

若柳 潮花・本田恵二朗・隠岐 不酔・戸田 古方・河村 日満・寺田 花宵・池田 古心・清水 一保・有働 芳仙・木村 涼人・森下 愛論・三井 酔夢・西田柳宏子・菊田いさむ

川柳塔

(同人作品)

中島生々庵選 (4)

葭乃先生と猫

清水白柳 (27)

創立一周年記念句会

(54)

川中島合戦

(川柳戦国志・五)

富士野鞍馬 (40)

川傍柳初篇研究

(四十二)

(18)

前田喜代人・

岡崎 重義・清

博美・藤井 和雄・

川端 柳風・故高須啞三味・丸

十府・岡田 甫・

泰山の租妻

(大陸放浪)

東野大八 (38)

秀句鑑賞

(前月号から)

後藤梅志 (28)

あ の 日 か ら 田 中 美 喜 子 (43)

痴 の 盲 録 高 鷲 亜 鈍 (41)

い の ち あ る 句 戸 田 古 方 (42)

私 の メ モ か ら 吉 田 水 車 (43)

故・井 蛙 君 に 想 う 河 村 日 滿 (45)

亡 父 ・ 長 野 井 蛙 長 野 尚 子 (44)

近 作 柳 樽 川 村 好 郎 選 (30)

大 萬 川 柳 「マ・ク」 入 選 発 表 清 水 白 柳 選 (50)

良 い 服 と 悪 い 服 谷 沢 好 祐 (44)

浜 ゆ う 西 い わ を (49)

初 歩 教 室 菊 沢 小 松 園 (48)

★ 柳 界 展 望 (薰 風) (52)

★ 各 地 柳 壇 (文 秋) (59)

「勤 労」 川 竹 松 風 選 (46)

一 路 集 「ピンセット」 内 藤 き さ 子 選 (46)

「聞き込み」 吉 田 水 車 選 (47)

★ 編 集 後 記 白 柳 ・ 一 三 天 (64)



中島生々庵選

日中贈答二句

大阪市 福井野迷路

麻雀と麻葉ごつそりとお隣りから
総蹴起そつくりそのままお隣りへ
ドル疲れポンド頻死で円特需
肅正の雲間に見える修正屋
七億にかしわ手打たす毛沢教
五億餓ゆ昔のポンドなつかしく

岡山県 浜田久米雄

扇風機回して座る夏の酒

おじさんと呼ばれじいさんとも呼ばれ

ニユースだけ聞いてニユースにあきれとり

秋の酒一級二級など云わず

松茸がもすこしほしい肉が煮え

児島市 本田恵二朗

さざ波を敷いてのんびり島眠る

青春の凱歌只今婚約中

夏ばてを知らぬ胃袋あきれられ

山の子の目をあきさせず海光る

なみなみとつけて喜寿なおたじろがず

高槻市 若柳潮花

名流舞踊会

花柳を賞めて水木の良さもほめ

助六へ宵の廊の通り雨

羽子唄の禿へ神の鈴が鳴る

夕立へみず音だけを残す恋

ローソクの焰のかげの地唄舞

大阪市 正本水客

あつちこつち歩いた末とは口にせず

九回裏で同点にしたほどの余生

これが平和ですとかバの鼻ねむる

伊賀上野にて

みの虫庵ほどよい木かげの人になる

釣月軒の暗さに芭蕉あるごとく

高槻市 傍島静馬

温度計またも見に立つむし暑さ

旅靴予備のおしめはパパが持ち

太い軸選つてマツチで耳そうじ

さも人生歩きつかれた夫婦連れ

先ず母を味方にしてから云う無心

京都市 松川杜的

みちのくの旅路に

八月を時雨とよびたいような雨

中尊寺にて

九百年耐えた棺とは思われず

奥八瀬溪谷十和田湖にて

奥入瀬のさわまる処止り滝

混浴の話もちよつぱりバスガイド

帰路に

日本海の入日へ車窓の顔が寄り

大阪市 市場没食子

噛むでなく甜めて入歯はガムを捨て

夕立の中に井然と女神像

東京へ孫を見に行く

飲まんでも飲むフンイキの好きな婿

消え銭もどつさり使こて孫の守

岡山市 服部十九平

主婦として家憲をタテにしてねばり

単独赴任自炊のコツも聞いて発ち

執達吏茶の間は一番後にする

みんなから父だまされて家平和

青森市 工藤甲吉

炎天を雉もむ如く救急車

赤とんぼ誰か故郷を思わざる

八月の二十日はんとはホツとした

釣り堀で目下浪人中に逢い

出雲市 尼緑之助

カツコよい若さ手錠で連れられる

踏み込んで一步相撲に教えられ

台風はまずこれだけですんだ庭

我が庭の朝顔秋を咲き急ぎ

大阪市 後藤梅志

帝塚山もうこの家も苔がつき

老いの意地風呂も自分で沸かす破目

紹鷗の杜天満宮

筆塚のまわり白粉草が咲き

神木へおなじ想いの人が立ち

大阪市 大坂形水

夏瘦せの秤確かめ確かめる

うちの子が先頭をゆく鼓笛隊

焦げつきも利益課目へ入れられる

秋 壁に蚊のしみ残つて

大阪市 山川阿茶

飲むくせに家計簿へ男口を出し

会社は併合二号さんビルを建て

敬老の日

ありがたし冷い世間と云うけれど

込みあげて声にならない秋ごろ

京都市 大鶴喜由

大文字が灯る停退第一夜

送らるるものの願いは心の辞

嬉しさは追つかけて来てお大事に

行動にうつすに白髪邪魔になり

名古屋 吉田水車

二つ三つ辛抱をして一つ買い

神様へホンコンフラワー奉り

ハイヒールもののあわれは坐りだこ

ヒレ肉の方から先きに包まれる

岸和田市 内藤きさ子

一坪の畠に実る種の義理

一週間使うて香具師へ腹を立て

岸和田だんじり祭

だんじりが小屋を出る日の大あくび

だんじりへ白髪が目立つ顔見知り

加賀市 那谷光郎

手不足へ人手頼んで邪魔になり

梅漬を干して駐在警邏に出

愚痴ばい祖母の代筆気が疲れ

骨董屋お世辞上手に置いて行き

大阪市 本多柳志

屋島

血の池を覗けばきしむ屋島駕

金比羅神宮

お土産は戻りに買わず杖を貸し

七百八十五段を蟬に急がされ

栗林公園

公園の踏めぬ芝生を賞めて立ち

大阪市 金井文秋

突き当りそうなをかわす自動ドア

自信作はめてくれないじれつたさ

よく実つてゐると雀やかまし

戦後派の中に生きてた丙午

堺市 高崎雄声

子燕の巢立ちし後の空虚なる

議員章に大衆一向無頓着

叱られるのもサラリーの内と聞いておく

フクロウが昼出たような夜の蝶

京都市 都倉求女

下呂・高山に遊ぶ

道中の残暑を下呂の湯で落し

日下部家

重暗く廂が昭和を遮断する

建売りの柱より太い自在鉤

こそ泥と間違えられそのぞき込み

大阪市 石倉旅風

しまいまで一気呵成に法師蟬

名をきいて先はおとこの児とわかり

五人目に勝つて沸かせた五人抜き

夏の陽が赤いポストの色を焼き

今治市 越智一水

阿波踊観光

雨降れば降つて渦まく阿波踊り

阿波踊りやつぱりうまい阿波の人

七色の灯が乱舞の渦へとけ

鳴戸にて

つり橋のゆれる恐怖へ渦の花

岡山県 藤原秋月

霊柩車だけ定員を守つとり

警官の友と歩いて疑がわれ

ボールペンそろそろかすれて行く寒さ

こんなとこにどうせ忘れる百舌鳥の餌

新居浜市 安藤桂仙

叩くなら叩けと釘もひん曲り

金策へばんやり影もついて行き

老いて子に従い朝をパンにする

手を振つて別れるだけの駅で待ち

岡山市 江国幽谷

あの人が通るよ時計がおくれてる

ゆつくりと歩いているのが部長です
テープレコーダー消すように忘れない
交差点人が渡つてゐるから渡り

大阪市 西 出 一 栄

すすきの穂こよみ通りに顔を出し
朝顔も終止符らしい花やつれ
籐椅子のそこまで秋がしのびより
定年が骨拾われてはつとする

奈良市 宮 口 笛 生

北陸路の旅

永平寺蟬の声にも秋があり
東尋坊海は地獄の深さなり

学園生活

くたくたになつて七時限終る
阿呆ばかり云うて許せる友であり

大阪市 中 川 滋 雀

クーラーは飲ます程度にビヤホール
燃えそこね不倫の烙印だけ押され
人には添え馬には乗れに欺される
迎え酒ゆうべ振られた目が語り

豊中市 寺 田 花 宵

連れと来てみてもころは独り旅
甲山見えて二日の旅おわる

腰おろすためにはいつた喫茶店
植木屋で昨日の花の名をただし

大阪市 児 島 与 呂 志

腹立てて帰れば妻の手内職
甘えつ子やつぱり宿題ためていた
大掃除簡単にして老夫婦
ようもこれだけつめ込んだと思う大掃除

芦屋市 丸 川 初 甫

思い出の遠い写真の色変る
客筋のよいのが自慢暇な店

明治村ヨハネ教会堂

オルガンも椅子も明治の色と型

明治村・名古屋衛戍病院

ここはお国の戦友の傷想う

倉吉市 奥 谷 弘 朗

有線は豚が出たからすぐ帰えれ
手ぶらでは行けず故郷も遠くなり
権力にストで向えば処分され
重税を憲法違反とやりおつた

岡山市 浜 野 奇 童

旅楽し愚妻本心に嬉しそう
苦勞した膳へ偏食そつぽ向き

考えてみるとは母もわからない
標語ベタベタ皆聖人にするつもり

善通寺市 岡田 拳法

主治医より手術を勧められて

術後不調の人も居て踏切れず
その上に血がいたる金がいる手術
働いていればと思う金である

自画像

これぐらい俺は戦う輩である

大阪市 橘高 薫風

白浜にて

荒磯風受けて一身帆のごとし
深夜子が泣きたり きつと流れ星
金ペンにふさわしき秋灯となる

兵庫県 小西 無鬼

蠅を打つ手がフト止まつた盃蘭盆会
哀れさは犬の散歩に引張られ

安物とクリーニング屋見抜いて居

島根県 藤井 明朗

ペン持てばすらすら書ける秋の夜
平凡な暮しも朝のお茶うまし
側近の演出 首相かけ廻り

尼崎市 長谷川 三司

瘦せたでしようとい達巻キユーと締め

どう見てもきれいと言えぬ月の裏
失礼して足を投げ出す後遺症

下関市 桜川 不水

水鉄砲裸のパパは射程距離

手枕は首が凝るよと老夫婦

暑いじゃないかそこのいてくれ高気圧

倉敷市 木村 千容

故路郎先生をしのぶ

銀瓶のおもさ笑顔で確める

ごくらくで柳人集めておわすらむ

柳話ぶつていやはる夢は盆の前

豊中市 戸田 古方

人ぎらいのままでまだまだ生きる肚

焚くほどの落葉で生きてゆくつもり

研究所モデルのアミも描きにくる

鳥取市 河村 日満

名産の産地に住んで金が要り

金になる内職ミシン踏み潰す

父帰宅内職やつと腰をあげ

門真市 福島 鉄児

産め産まぬことで揉めてる共稼ぎ

義理で来た見舞火事場をまぜ返し

産むことに決めて生活切りつめる

川柳塔誕生満一年

西宮市 樋口舟遊

軌音たからかに二年目へ驀進

新しい斗志路郎忌忘れない

川底を濁して去った魚である

大阪市 中島小石

名月へすすきおだんごそれでよし

兎さんが居てお月見も楽しけれ

七回忌わすれがたみの声がわり

倉敷市 野田素身郎

水虫の手入れ終つて決裁判

お礼言うてるまにうちの子箱を開け

遅れることを見越し会議の時間決め

青森県 木村涼人

漫才にされて代議士逮捕され

ただ生きる為に生きてる鉢の松

もめている土地漁夫の利を得て雑草

岡山県 田村藤波

年令を問えば九十を誇りたり

偽物だとして買うとけば間違わず

世話をした親は故郷に置き去られ

笠岡市 木山遠二

日日好日屋敷のうちを散歩する

健忘症笑つちや居れぬほど昂じ

としよりが為になること云いたがり

大阪府 西 いわを

キリストで救われ仏教で葬られ

ブツつけ本番わたしの顔はどうでした

久振り会うて話すはきれいな言

熊本県 有働芳仙

夕立が来て言い出せぬまま別れ

インスタントの袋がたまる共稼ぎ

財布など要らぬ千円亭主なり

岡山県 大森娛句楽

洪紙に似た肌色で子は帰り

丙午喜んで産むのへ授け

嘘云えぬ性戯れに腹をたて

諫早市 川岡靈眼子

アイロンの熱はつばきで測られる

ぐるりつとまた元に来たはしご酒

義理でとる新聞で賞金まで貰い

ハワイ 築山快夢起

あの頃の思い出はるか柳行李

当分は生きるつもり再縁か

瘦腕をさすつて派手な過去を悔い

高槻市 福田丁路

すれ違い夫婦予期したことになり
狸とも云われ意気天をつく

初孫女子誕生

初孫を抱いて漫画の顔になり

竹原市 杉原愛鳩

壁の服着ればコオロギとんで出る
だしぬけに倒れてからの葉びん
おかえしがすぐ来て貧乏人ひがみ

枚方市 宮川珠笑

昇給へ百円亭主据置かれ
月給の額は知らないまま愛し
腹立てて聞けばうるさい秋の虫

神戸市 仲 どんたく

年頃が居て年頃が気にかかり
扇風機におむつがなびく一年目
初対面仲を取りもつコツプ酒

小松市 関戸宗太郎

高利貸しねらう獲物があつて貸し
甲子園勝った涙はすぐ乾き
専務派にされて専務の顔知らず

平田市 久家代仕男

休み明け教師はチビリチビリ締め

災害も矢つ張り有つて食うてゆけ
豊作をセールスマンが保証する

香川県 三井酔夢

亡父七回忌

焼香の順とり合つて孫もめる
七回忌エレキで踊る孫もあり
地藏盆愛の遍歴聞かされる

愛媛県 渡辺曉童

旅なれた油断が宿を取り損ね
運賃は安いと思う一人旅

からしづけみそづけ人間くすりづけ

石川県 浅野芳朗

拭く汗は事務所の中へ持つてゆき
囑託という名で飼ひ殺しにする心算
孫を借るにさんざん注意され

伊丹市 小川静観堂

敗戦の大罪いまだに俺を責め
この孫とこの先きいつまで生きられる
敬老の日が近づいて気忙わしい

出雲市 中川晃男

もう少し買うのを待てばまた上り
淋しい日ある街角で花を買い

針金の垣根にバラが咲き誇り

大阪市 河井庸佑

昇進へあとからわかる裏話

はめられていい気になったをたたかれる

よいように取つてこの場はおさめとき

富田林市 浅川八郎

いやなこと忘れたことにする余生

老いの一徹余りにも弱く

芸術と言う名で女脱がされる

鳥取県 清水一保

二十年前も今夜と同じ月

稲作況報告——農林省

農林省自分が作つたように言い

おごられて居る方がもてて恐縮し

高槻市 山田季賛

水虫をなおす素足の朝を出る

夕立が去つて駅長草を引く

意見聞くのも承知で金借りに行き

宝塚市 小島無聖

逆境か素足でのぼる朝参り

やるせない細い腰だよハイヒール

紳様も寝てはる頃の鈴を振り

守口市 羽原静歩

横断はこちらとガイド旗を持ち

北浜の裏も知つて買い遅れ

メモとつて又聞きかえし聞きかえし

美弥市 安平次弘道

住めば都台風銀座にしがみつ

記事になる松茸庶民のものでなし

鰯雲案山子はこわい顔で立ち

大阪市 今西章雅

長襦袢旧婚の旅燃えさせる

あつさりとミスを認めた器量人

盆踊り月に時計の針がない

大阪府 谷沢好祐

ハイ下宿代と女房殿に出し

三食と昼寝付きですよく肥り

佐藤さんいくつも正す襟を持ち

高砂市 吉原紅月

雨が止んだらし鈴虫が鳴き始め

掌(てのひら)に秋なすの色染まりそう

蚊取り線香明治と同じ匂いなり

宇部市 平田実男

目のゴミを取つてもらえば噂され

思うつば香具師とサクラが目で笑い
鼻の差で勝つたを忘れてつけ上り

大阪市 川口弘生

クラシックしかつめらしく聴かされる

大臣が出ぬので小さい駅のまま

一と夏ごと妻のビールの手があがり

鳥取県 渡辺乱坊

スキヤンダル流して平気で生きてはる

大山登山

山登りこれを人生だと思い

内痔疾にて入院

お見舞が帰ればどつと痛み増し

福岡県 太田湖平

おどけては居らねど子牛あんな声

慈雨が来て後れ乍らの稲穂出る

野の仏母に似給う二度詣る

守口市 村田瓢太

踊りの輪中の恋人だけ見つめ

五線譜も読めず人氣は別にあり

箱だけは大きかったが二重底

大阪市 宮尾あいき

ヘヤピースの高さ脊丈の中へ入れ

思いやりのように小銭をスリ残し
小銭しか持っていない方が払わされ

芦屋市 松下たつみ

欠点を欠点とせぬいい育ち

おしほりを使つて客の顔となり

こまごまと挨拶してゐる初対面

兵庫県 大江秋月

目の正月する宝石を見てまわり

町内の日役は頭数ばかり

寺と墓粗末にしない父の年

大阪市 森本良夫

同窓会もの腰低いのが恩師

わが家にも電話が引けて妻の声

仏壇へすなおに向う幸の夜

鳥取県 森田布堂

色も香も奪わず蜂は蜜を採り

妹の育児を叱りまだ嫁かず

約束を信じる夜の月が冴え

和歌山市 二越俊爾

団参にみんなの手前手を合し

親不孝の見本のような芭蕉の葉

税金を命つなげる程に出し

大阪市 不二田 一三夫

ブルドーザーのエネルギーうらやましと見る

一人で歩くから痴漢とまちがわれ

大原美術館

名匠が相ずまいする壮麗さ

室戸市 奴田 原紅雨

火消壺から煙りが出てるような恋

わが道をゆきつ戻りつ七ころび

岡山県 直原 七面山

サンガラスを掛けて人目をしのぶ恋

余命なき父へ数の子買うて来る

加賀市 野村 味平

一徹でよかつた汚職の中に生き

大陸へ片腕のこし敗戦日

呉市 林野 甦光

背のひくいまずさは宿で着るゆかた

美しい朝を徹夜に見直され

兵庫県 河原 みのる

草刈りへ踊りの手振りまだ抜けず

枝豆とビールいつから出来た仲

布施市 本多 清人

科学には無縁相撲に検査役

次女入院

帰りたい子供なだめて寝に帰り

竹原市 山内 静水

念押しておいて自分で肚をたて

耐えて来て私にだつてある自由

奈良県 木村 十悟

オホツクの風だよ美幌の尖に佇ち

一見に如かず娑婆の網走いい所

岡山県 池田 古心

毒薬を使つて出来た米を食い

植えとけば出来ると稲作釣りに凝り

大阪市 水谷 竹莊

四海波習い仲人するつもり

小切手をわざと仲居の前で書き

岡山県 横山 一声

自家で参いるお墓が粗末すぎ

食欲の秋に金魚はもう食べず

ハワイ 羽佐間 柳葉

再会に先ず血圧を語る齡

勇退と云う名で老朽鹹にされ

笠岡市 松本 忠三

どしゃぶりの雨だというにサンガラス

扇風機社長の方へ頸を向け

小松市 馬場魚山

墓地に来て見れば詣つて呉れた跡

墓参団現地の土をひと握り

熊本市 楠田英子

初恋は遠くやさしく夫を見る

ひげづらの息子うなずく事も云い

西村改め

京都府 清水谷 句楽坊

男鹿下北に旅して

おそろしい地獄のお湯で労れとり

巫女集せの地獄の風呂でひげをそり

新居浜市 近藤凡生

補聴器はずし余生を送る肚

蜘蛛の知恵借りて生計の策を練り

大阪市 天正千梢

夫捨て子まで捨てて何がほし

おつ母はイメージだけで沢山さ

鳥取市 藤本礎山

子の寝顔どれも孝行しそうなり

エレキギター感電してると祖母が云い

大阪市 室谷鉄舟

風呂洗う妻へ呼鈴慌わてさし

扇風機大正の音でよく努め

大阪市 米虫一乃字

金出して盗まれた品受けて来る

意地悪るな顔ささやいてすぐ帰り

大阪市 本庄金三

電燈を消しても内職目に残り

戦争で逃げ廻つた頃の桐ダンス

大阪市 宮地双楽

叩き売りあれで採算棄てていず

考えることは出来ない計算器

岸和田市 葛城伊三郎

これですなと虫歯へさわるピンセット

聞き込みと知らず話の核に入り

児島市 伊丹阿喜良

方円の器に従い不良めき

奥さんより料理のうまいのが自慢

松江市 岡崎祥月

味わつて見れば苦勞も甘いもの

借金はないが生活費に追われ

下関市 原千里

丸焼けの宿に預けた貴重品

せせらぎの宿の窓辺に舞うトンボ

泉大津市 高津徹也

残り雨ふと見上げてる洗い髪

王宮の鏡とも見ゆ赤子の瞳

姫路市 隠岐不酔

選りに選りそれに粗品と書くつらさ

月賦着て月賦をはいて乗る月賦

加賀市 細呂木魯木

化学する主婦ヘメーカーのあわてよう

やかましそくに雀案山子に止まつて

松江市 柳楽鶴丸

再就職 役にたつた免許証

結婚五年今日百円亭主出る

富田林市 岩田みよ

とつおいつ思案に倅せついで来ず

戒名の控え待つ庭萩いつばい

和歌山市 土谷城石

さあ来いと構えりや台風向きをかえ

鈴虫の最後は雌の餌食なり

泉佐野市 大工睦夫

反抗期も孝道で押し切られ

親の義務果して義兄と再会す

和歌山市 野村玉酔

二階まで聞えるように愚痴を云い

あの髭が又も出しやばる夏祭り

和歌山市 西尾公作

蚊が多いと文句言い言い立ち話

釣天狗車でたんと仕入れて来

★

清水白柳

戸車の錆びついたよな老夫婦

ぬかみそにつけても指輪くさらない

米びつを男がのぞく寂しい日

摩太郎氏愛嬢御結婚を祝して

式台に佇つ花嫁を見守る瞳

川村好郎

日傘さす手に秋風ふと感じ

正体はどうであらうと秋の月

行き過ぎの文化ヘブレイキのような事故

人生の信号突如赤となり

ふと見つけたたり妻のため息

北川春巢

台風の動き気になる管理職

映画見る方の眼鏡がいるテレビ

腹具合悪くてまたも義理を欠き

同権の時代内助の功を云い

字引く手の冷え秋の夜が更ける

西尾 栗

菊沢小松園

あつけない新幹線に妻不服

女房のへそくりで訪う古都の秋

美容体操五十三才六十五キロ

十日程こうしていたい宿浴衣

趣味と実益釣人口に石ブーム

若本多久志

松江梅里

同情も先ず損得を考えて

敬老の日だのに祖母のお留守番

事業不振晩酌の日が多くなり

何も言う事なく老婆と飯がすみ

骨まで愛して刃傷沙汰になり

ひと通り返盃もして社長消え

考えておくと握りつぶす肚

目標にされてしんどいことばかり

働き蜂に似た父の計を悼む

本腰で口説けばパパがありますの

川柳塔社同人総参加！ 一人一句（60字以内で句の説明）

新年号を飾る

ユーモア特集！！

用紙は原稿用紙
十一月二十五日着便

いま川柳で忘れられているものはユーモアである。雑詠や句会で発表したユーモアにあふれる句をどなたも一句や二句は持つている。そこで同人全員がそのうちの一句を新年号に発表していただきたいのです。

川傍柳 初篇研究

(四十一)

前田喜代人 川端柳風

岡崎重義 故高須啞三味

清博美丸 十府

藤井和雄 岡田甫

430 くそ漬のかんざしせなあ式朱に売

眠狐

川端「二朱」は、吉原で新造の揚代が二朱で、吉原女郎としては最下位の揚代であった。「せなあ」は兄または若者であるが、ここでは実兄であろう。「くそ漬のかんざし」は田舎臭い女の意で兄に対する妹と解する。句意は家計が苦しくなり、妹を身売りさせた兄のことであろう。

高須「江戸府内の糞だめに落としたり銀カシを、在の若衆が汲み取りに来て汲み出し行き、それを洗って二朱に売ったという字面通りの句であろう。当時江戸府内の糞便は、近在の百姓の肥料として、ちゃんと持ち場はきまっていた。

清「賛。二朱で売ったのは、「くそつけのかんざし」村の嫁は買」(玉)である。

藤井「初めは、雪隠出合いの臭い仲の現場に残されたかんざしで、女をゆすって二朱とったと思ったが、清氏の引用句を見て

高須説がうごかない所。

丸・岡田「高須説賛。

431 急な客玉子を二ツぶちこわし 一甫

高須「急な客」は突然の来客、そのもてなしに不意のこととて何の用意もなく、卵を二つわったという句で、現今にも通じる写実句。

丸「賛。しかし下五の表現が少し租雑。

岡田「同。

432 めれた白むくを衣桁へハツ干し 単弓

高須「白むく」が濡れたのは汗のため八月一日の暑い日に白むくを着たのは吉原のオイランだから、それを脱いで干したという句。「ハツ」は八朔を利かしただけと思うが、そこに多少不安がある。

前田「賛。「めれた」が艶があり、「ハツ干し」の意図的なものを扱っている。

川端「賛。ただし衣桁は質屋の衣桁で、日は八月二日でしょう。「八月二日白妙の

衣はし」(籠三・28)「八月の二日質屋へ雪がふり」(拾七・7)「八朔の雪は質屋に流れ込み」(二二一甲9)。

丸「礎稿賛。質屋の衣桁まで考える必要はあるまい。一つの衣桁にハツ干すとは不自然ではあるが、単に八朔の利かせと見たい。

岡田「同。ただしこれも駄句。

433 ごほんくで灸がすへにくい也 一甫

高須「労咳への四火」灸をすえてやっているのだが、時たませきこむので灸がすへにくい。それだけの句。

前田「賛。「せきが来たのでおっことす四火のきう」(九・36)。

岡崎「これは真正真銘の結核性労咳。

丸・岡田「賛。

434 縫ひ出来た小袖の上に四方面 単弓

高須「四方面」は四方正面で、真四角のものでどっちも正面に見えるもの——将棋

盤が基盤のようなもの——それを縫ひ上げた小袖の上におくのだから「押し」のためである。今でも出来上った縫物は寝押しをしたり、その上に坐ってもらったりする。基盤を伏せておいたりする。すなわち「縫ひ上げた着物の上へ基盤伏せ」であるが「四方面」は何であらうか？

前田 贊。「四方面」がわからない。名詞でなくて、座って四方を見ているのではなからうか。

丸 礎稿の如く考えるが同様四方面が決定できない。和算などのことではないかと思うが調べがつかない。

岡田 四方面は基盤。カヤの木で作った四方とも柱目のそろった上等品をいう。句意は礎稿の説にてよろし。

丸 「莽うちが来たでなまおしの小袖也」(二一・ス6)で礎稿動かぬ所。「四方面女用の用は足を上」(傍三・19)でやはり基盤らしい。

435 いわほそびへたへ海鬼灯を付ケ 里弓

高須 「海鬼灯」は「海酸漿」で広辞苑には「新腹足目の具テングニシ・ナガニシの卵裏で、皮堅く多く連なつて海中の岩石などに付着し、形は巾着または長刀に似る。孔をあけて中の液を出し酸漿に代えて吹きならす」とみえてゐる。この句は鬼灯売りが、海中のイワオのソビエたような形の荷台を造り、それへ海酸漿を付着させて

売りに来ている情景を詠んだものと思う。清 贊。但し、浅い手桶のようなものに入れて持ち歩いた。

藤井 によく夜店で見かけたもの。アセレンのにおいがする。

丸 贊。海鬼灯売りの風俗は清説の如し

岡田 同。

436 仁王経よんでる所へ伯母が来る 里弓

高須 芝居「綱館」の句。羅生門で鬼の片腕を切り取つて来た渡辺綱の館へ、当の鬼が伯母さんに化けて、その腕を取り返しに来たという句。

前田 「仁王経」は「にんのうきよう」のこと。綱は七日の物忌みをして経をよんでいたといわれている。

丸 「伯母のある事を茨木どこで聞き」(明四・信2)「あゝも似るものかと綱を悔しがり」(一九・21)

岡田 贊。

437 これでも元とはいふ傘とかしてやり 一甫

高須 俄雨の貸傘。貸す人が「これでもモトはよい傘だったんだ」と言いわけしている句。それだけのこと。

岡崎 骨ばかりの傘だからてれかくしに

丸・岡田 贊。

438 たとへ忘れても女ハ汲ぬ川 門柳

高須 六カ所にある玉川(六玉川)の中

の四・高野の玉川(和歌山県高野山)の句で「忘れても」は弘法大師の歌「忘れても汲みやつらん旅人の高野の奥の玉川の水」からの文句取り。この玉川の水は毒だといつて汲まねかつたが、それは名水の乱汲を恐れてたとの説もある。いずれにしても事実にはなかつた連想句。「こやの玉川毒で名が高し」「二三人死に玉川へ札を立て」(傍三・24)

丸 贊。女人禁制の山だから、たとえ弘法大師の歌は忘れても、女は玉川の水を汲む気つかいはいない。

岡田 丸先生のいわれたように、女人禁制の山という説明がないと意味をなさず。

439 道中記なんにするのか嫁は買 梅枝

高須 「道中記」とは、今の旅行案内のごときもので、宿場宿場の名から、その間の里程などを記した道案内書。それを買つて嫁が何にする気か、という句だが、この嫁は鎌倉松ヶ岡の縁切寺行きを企ていると暗示している。「その意得ず嫁の所持する道中記」「鎌倉の道など聞いて嫁をどし」(二五三・15)。

丸・岡田 贊。

「川傍柳初篇研究」のバックナンバーがあります。詳細は本社編集部へお問い合わせください。

はたらく うた



舞踊家 若 柳 潮 花

肩はすに落し女の呼吸する
ほつれ毛が欲しいかずらの髪の艶
人形師のように顔師は書きはじめ
髪つけの匂いでくぐる注連飾り
稽古場の恋は明治の色です

芸が身を助けるふしあわせか、否かは別として、日立造船検査課を退職すると同時に、宗家若柳流の師匠として籍を置いている。芸の道のきびしさにも馴れ、朝は静かなうちに頼まれた新しい踊りの振付をし、古典舞踊の譜をとる。十時過ぎから師匠の稽古場に顔を出し、午後三時頃から各稽古場に顔を出し、午後三時頃から各稽古場を回って帰宅するのが夜の十時から十一時になる。日曜日は休みにしているが雑用がたまってくる。舞台前には特に忙しい、しかし舞扇を持つ限り舞台の灯を通して働く者の匂を、残してゆきたいと思っている。

歯科医師 本 田 恵 二 朗

天職に世辞がいるとはやっかいな
天職を愛すその目が生きている
歯車の音さわやかに技工台
今日もまたカルテぎしぎし音をたて
白衣の血赤あり茶あり今日終る

職業分類を見ると私の職は自由業ということになっている。文士画家弁護士類など同類である。恩給がつかめかわりに定年がない。ところが三十六年も続いていると定年が欲しいと思うようになって時々油を売る方法を考へたりする。長男が歯でなく医の方になったので正に後援続かずである。わが職わが一代にして終わるということとはさびしくもありさびしくもなしである。

診療室にも技王室にも川柳という歌声が潤滑油となって毎日がリズムカルに明け暮れることを柳祖柄井川柳居士に感謝する。



同人特集

税理士 隠岐不酔

せわしない光る鳴る降る又光る
減税と言うて税吏の尻叩き
ニクラシイ税吏臍までとると言い
呉服屋の丹那洋服着て御座る
老人ときらわれながら世話をやき

鬼が住むと言う 税務署で十数年間録を食む。然し僕は 決して鬼でなかったと断言する。退官後税理士を開業して、幾分でも前世の罪亡ぼしをしようと決心、二十五年間事務員二十名を督励して良き納税者の相談相手となり本日に及ぶ。僕自身では満足を与えていようと思うが果して？。永年業界の支部長を仰せつかつている。口下手が禍して、断ることが出来ないの。自分の仕事は一切事務員任せ。結構な身分と思われようが、決して、決して。

追われるな 仕事を追えと 訓示して

教師 戸田古方

卒業期裏の話もしといたが
先生のチームぐらいには勝てて
ひげを抜き終るとテスト終ってた
聴えてるつもりで教師汗をふき
ジャンプ抜かしてラジオ体操ついでする

教師生活二十五年、比較的新しいのを五句
ならべましたが、馳け出しの頃は
“追いかけて来てまで女生徒のわかれ”
が珍らしく、政界へ入った不在校長（元参議
院議員大阪府知事左藤義詮氏）を募って、
“校長の居間茶道具の一揃い”
と身勝手な理想像を描いたりしました。一面
“恩なんか知らずくすくす子は伸びる”
とうそぶいたこともありました。
孤篷を古方に変えて下さったのは路郎師。
歴史をこよく愛し、講じる僕でした。



平社員議員 河村 日満

初笑いストでおどかす顔でなし
運転は俺が俺がとスト解除
デモ用の靴金を打ち金を打ち
ふくれ面のまんま一対一で会い
十二月よそのストにも馳けつける

さて、世に、「労働貴族」という言葉がある。勿論単産の大小によってその貴族振りに違いはあるが、私は小は小なりの労働貴族としていい目をさしてもらった。例を挙げれば、まず、三十三年の「アメリカ視察」。そして毎年毎年の全国委員会、大会での他都市への出張、お蔭で私は北は北海道から、南は鹿児島までそこそ行かぬところはない、とまでの旅行をさしてもらった。とここまではよいが、勿論それには会社での出世欲と、世間態だけは棄ててかからねばできぬところだ。

喫茶店 寺田 花宵

気の長い恋にコヒーが二つ冷え
春に咲く花をわが手で咲かせた気
思い出はひとつ一つに植木鉢
町内の義理に浸っている温泉
スピッツの顔色読んでから出掛け

女手ひとつの店でも若い二人にはこよなき
楽園か。コヒーを冷やしてしまふ清純な恋、
気の短いあるじを落ち着かせて呉れる。花好
きも球根植えて種播いてとまではいきませ
ん。夜店育ちの鉢の木に水をやり陽に当て
て楽し。時には娘のひと束の花にも飲んでみ
る。義理半分の温泉行に少しは凝りをほぐし
てあたふたと帰れば不足顔で送ったスピッツ
のクリがあるじの想像に訴える表現の演技に
忙しい。今後の私の『はたらくうた』は私の
生活の中で皆様の『うた』について行きたい
ものです。



同人特集

農業池田古心

百姓の六月顔の髯が伸び
ストしよと国会揉めよと農繁期
百姓が弾けば算盤赤になり
葉代だけに働く気が仕出し
貧農と歎くな田を持ち家を持ち

浮世絵（保存下）二百数枚と刀剣数振（刀
剣処分してなし）と三人の娘と胃痛を財産と
して、昭和十四年三十四にして親元現住所に
帰り、怠農として生活が始まり貧と戦いつつ
来たが、人間上出来でなかったため、農後継
者無く貧乏持続。還暦と同時に悟りをひらき
その日が食えたらの生活を浮世絵と胃痛を後
生大事にし、稲は植えとけば出来る主義で釣
りを楽しみ、川柳を楽しみ「かがみ川柳社」
を創設、代表として句報発行に通巻一五七号
をいつまで続くことか、多趣味男の怠農右の
ごとし。

団体役員・町議 清水一保

「選挙戦、推す心、推される心」
激励の便りへそつとふく涙
参謀へ心のゆとりを見せて笑み
「烈しい戦いを終えて」
善戦をライバル互いに賛え合い
公約の重みを意識する門出
腸（はらわた）に苦勞して沁む情 誠

社会とはさまざまな型の人間が、さまざま
の人生観による、さまざまな生き方をし、然
もさまざまな善悪が相集まる中で、互いに生
き抜く為の競争の場とも言えます。生く抜く
ための手段ともいふべき職業はいろいろであ
る。中で公職とは生きる為の手段、生計の為
のものでは絶対ないのであるが、しかし、こ
れによって大きくその人の人生、運命を変え
左右する。公職は多種多様であるが、共に選
挙というきびしい試験とフルイの網を通して
大成されます。これによって知り得た人間の
機微、善意、誠等は永久に忘られない。



教員有働芳仙

臨時雇画鋏で止めてある名刺
ペンだこへ大臣の夢消えていた
定職が欲しい鶴嘴雨に濡れ
ビルの窓僕の溜息雲にのり
あの時に死んでいたらと笑い合い

教員なんかなるもんかと思っていたら、終戦後食わねばならぬ手段として教壇に立つてしまったのが契機となり、ずるずると二十年近く経ってしまった。病院の臨時雇を振り出しに十九の年から一人きりで東京へ出て、青雲の夢をあためていたが、運命の歯車は幾度も僕を孤独の淵へ追いやった。会社員、軍属、土方、商人と波瀾に満ちた半生の後、いつの間にか教鞭を握っていた。働き疲れた自分の顔の風雪の傷痕を少しずつ拭い去ってくれるのは、「先生お早うございます」と言ってくれる子供などの純真な笑顔である。

商業木村涼人

二二が四を信じてボロイ夢を捨て
金策に出かけるバンド締めなおし
くそ意地は張らじ五十の坂が見え
そぞろ秋約手の期限迫りけり
幸福は後に来るもの汗を拭く

もとはと言えば郵便局畑に育った電気通信士。第二次大戦中は駐蒙軍に属して走り回った、そのころ故路郎師とも張家口で同じ釜の飯を一、二回食っていたらしい（三十七年路郎師来青時の会話から）陸軍曹長で、支那語の二等通訳官。

一抹の夢去りてりんご園に囲まれたふるさと
の小さな町に四坪ほどの食品たばこ店を開いて十有七年一こうに埒があかないが、今は
高校二年の一人娘の無事成長を乞い願ひ、妻
と二人で終日揉手一手で『良き敗者たむ、
五十へ策をたて』の生活ではある。



同人特集

通信病院 森 下 愛 論

廻転椅子言葉つかいも替って来
窓口の早口ボカンと顔を見る
掃除婦も官庁という掃きっぷり
急患の附添手真似でよく喋べり
アイロンへすねてるようにシャツののり

病院の仕事を初めて二十三年、八時半から
五時まで、名前の通りアイロンを持って働い
ています、先生や看護婦さんの白衣が一枚、
一枚と手で仕上げて来たのが、近ごろではキ
カイ化されて能率は上るけれど、ちっとも私
の氣に入りません、矢張り古いんですね。
完全看護・患者サービス、病院のモットー
に従って末端の私たちもせい一ぱいの努力し
ています。

主婦 三 井 醉 夢

酔いましたと云いつ女将の胸算用
やけ酒をいたわるように女将つき
サインしてマダム客種使い分け
悲しき習性おごられていて計算し
アルバイトあたって嫁は強うなり

小さな開業医の妻たる者、労働基準法の適
用なし、借入金返済に四苦八苦、給食、家事
育児と一人何役もの忙しさである。兼業には
ついていて、開業以前七年余、有名な「こん
びらさん」のお膝元で「二鶴」という腰掛を
アルバイトしていた。夜ともなれば自称街の
名士、常連こみ合って雑談に花を咲かせてい
た。カウンターの中から見たさまざまな人間
像は、私を大いに成長させてくれた。川柳と
の因縁もこの時代に生まれたものなので、今
回は懐しみながら古い句を拾ってみた。



会社員 西田 柳 宏 子

風邪ひいた位で休んでも居れず
学校があり転勤へ別居する
停年も近し我慢をするでしょう
麻雀で残業代をかせいで来
はったりもなくて万年平で老け

東京ボン太ではないが、生活がかかってん
だもの経営者だろうが、勤め人だろうが、ど
んな職業に従事しても、その難しさはなんら
変わりなく、どれが楽だとか良いとかいうこ
とはないはずであるが、矢張り身近なミッ
チイ句ばかり出来る。これも一小市民的なせ
いか？誰の句だったか失名したが

月給日行ってくるぞと勇ましく
身につまされる句であり、私も毎月これを繰
り返している。そして平々凡々として。

だんだんと枠にはまった型になり 柳宏子

私鉄阪急 菊 田 い さ む

冷静におくソロバンのまた違い
幹事の浴衣一つのこして風呂へ行き
栓抜きを幹事が持って酌ぎ廻り
一泊の志摩妻へ真珠を言うて去に
最後までベスト尽したお人好し

入社以来二十一年余、資材部に籍を置いて
毎日会社のために粉骨砕身、努力しておりま
す。(自称?)家の事は妻にすべて、まかし
きりですが、人のうわさでは非常な愛妻家ら
しいです。(妻が聞いたらくシャミ)。

たばこは喫いますが、身体に似合わず、お
酒の方はまるつきしの下戸、しかし酒席の雰
囲気は大好き。それを買われたのか、課の旅
行などの世話は全部一人でする、それが私の
もって生まれた性格でもあり、私自身満足し
ているのです。

葭乃先生と猫



清水白柳

万代の川柳雑誌社を訪れたことのある柳人なら誰れでも気付いたことだろうと思うが、いつ行っても必ず猫にお目にかかったものだ。迎えにも出て来たし、また送ってもくれた。それ程麻生家と猫は切っても切れぬものであった。

いつ行っても猫はいるのだが、その猫は大きかったり、小さかったり、色もさまざまだったので、その猫が何代目の猫なのか少しもわからなかった。聞いたのかも知れないが、元来余り猫好きではないので聞き流してしまったのかも知れない。

葭乃先生に叱られると甘えた鳴き声で首をすくめる小さな猫などは可愛らしかった。先生が意識しておられたのかどうかは知らないが、あの雑然と積み重ねてあった古い柳誌は

一枚も、ねずみに囓られた跡がなかったのは猫のいた威力の賜だと思われた。明治時代の古びた紙切れが無事に残っていたのも猫のおかげだと言えなくもない。

その猫も生駒までお伴して可愛がられていたのは川柳塔にのせられた葭乃先生の句にもうかがい知ることが出来る。

猫のイコイズムがイコイズムな人と住み猫のわがままに共鳴をする雅量出来背の青い魚は食わぬ猫を抱く

(二、三月号)

葭乃先生と猫とのおつき合いは五十年にもなることが古い柳誌を調べていたら判った。それは、路郎先生が発行しておられた柳誌、「雪」大正五年六月号にのっている一文からである。原文のままのせさせていただく。

埃一束

ヨタリスト

路郎クン何処よりか小猫を貰い来りてカイゼルと名づく。妻君二人の子供さえ中々面倒なるにとて顔をしかむ。まあ、ええがなあと路郎クン三人の子持の積りなり。妻君、諦めてカイゼルに与ふるに洋食皿を以てす。それに長女の牛乳の幾分を注ぐ。路郎クン、やれやれと思い、まづまづ家庭円満と。

妻君再び曰ク純ちゃん(長女)の茶碗からカイゼルが御馳走に預らんとし、カイゼルの洋食皿から純ちゃんがいやしんぼして困りま

すと。妻君又曰ク、御世ちゃん(二女)の胸の上にカイゼルがあがって困ります。路郎クン遂にカイゼルを門下生に贈る。

(大正五年六月一日)

このカイゼル君を贈られた川柳家はどなたであったかは知る由もないが、葭乃先生の句集「福寿草」の中にある猫の句を見ると、いつのほどにか麻生家には猫がいたのである。

箸うごく通りに猫の首動き

お店繁昌忘れられてる猫の皿

飼猫の盜癖ゆるす気にもなり

叱られもせず迷猫納屋で産み

猫の子人の子ウジャヤ／＼ラチオやかまし

い猫今日もお粥のしづくだけ貰い

句集「福寿草」から

こうした長年の猫とのおつき合いの中から川柳塔「三月号」に葭乃先生がお書きになった「猫なみの目的」という名文が生まれたのであろう。いま生駒で葭乃先生という猫はどんな猫かは知らないが倅な猫だと思ふ。

うちの猫

葭乃

どうせ開く障子を猫は外で待ち
お膳から追われ毛を掻く猫のやけ
猫甲斐もなくうちの猫骨を立て
嗅いでみて食べない猫に育てられ
星月夜猫も詩情を知る如く

(川柳塔七月号)

秀句鑑賞

前月号から

後藤梅志

鳥の学者は禽の眼をもつ

(清生)

この句は、人性のふかいところにレンズを当てているようだ。

小鳥の習性にたえず目をつけている小鳥学者は、小鳥の習性を知るばかりでなく、その啼き声にも、羽ばたきにもトリの心を読みとり、トリ仲間似た感情を抱くことを諷している。

禽(トリ)とは、「おおむ」のような、また「ふくろう」のようなものの眼を指すものである。人の声を真似たり、人間の動作をじつとかがう、おおむやふくろうの眼に、だんだん小鳥学者の眼が似てくるというのである。落付いて、味わいたい句だ。

夏姿されど一分の隙もなし

(千客)

女の夏姿というものは、元来イキである。街を歩いている、どこか仇っぱいはずだが、近頃見る女性には、一分の隙もなく、マネキン人形のようなと、この句はいう。

夏の女の美しさは、臨月も近い女が、ゆか

た姿になってあるく、ところにあると、明治の作者は云っていたが、それとこれとはえらいちがいである。

一分の隙もなし、よく諷刺している。

我が影が足にまつわるアスファルト

(鉄舟)

わが影が、足にまつわるとはおもしろい。あえて説明を要しないが、影が足にまつわるのは、太陽が真上にきた舗道で、街角を幾曲りするあたりである。

人通りの多いビル街を、汗みずくであるく姿を思わせ、見事な描写という外はない。アスファルトが、びったりである。

かんと鳴るもののあるなり恩師の忌

(蕉風)

すこし観念的だが、恩師の忌でよく分かる。七月十日慶沢園で行なわれた路郎忌は、幽邃な庭園に、ひろい地域から門弟や知己が集まり、一日の歓をこした。雨はふくんでいたが終日、天候にも恵まれた。

一生を川柳雑誌の刊行に尽された、路郎先生の一生は悪戦苦闘に近いものがあつた

う。それが歿後一年を迎えた盛儀であつた。千言万語を費やすより、作者のところに、かんと響いたこの一句が、それをよく表現している。

じよろじよると胡瓜がのびて雲の峰

(水客)

「じよろじよる」という表現は、この作者独特のもので、「にょきにょき」でもない、「くねくね」でもない、不思議な表現だが、そんな気がするのには不思議である。

手づくりの胡瓜の棚へ、あとからあとからいろいろな形をした胡瓜が成り、なかなか雨を降らせてくれぬ雲の峰が、高く聳えている田園とも見える風景がよく詠まれている。

この句は、作者の心を宿しているようだ。じよろじよるは、この句のいのちだろう。

さびしさは市電のレールだけ残り

(雄声)

大阪市電は、赤字のためここ二、三年のうちになくなる。永い間市民から親しまれて来た、かつては大阪市民の誇りであった市電が無くなることはなんとしても淋しい。レールだけ、は敷石全体であること勿論である。

どうせ赤字なら、市民のため早朝の割引電車を行き止めてはどうだろうか。半額にでもしたら増収はまちがいない。

「与えよ然らば得られん」という道理を、この頃はみな忘れていた。市民を喜ばせることには、黒字になりつこない。

子ほんのうパンチの効かぬ眼で叱り

(文 秋)

「パンチの効かぬ眼」という一句は、いい得て妙である。

子を叱るのに、パンチをきかしてしまつては、子供は悪童になる計りである。上流の子は、その点、両親に恵まれてゐる。

子供はいつの時代でも、親を見習う。親の振る舞ひ動作が、良い子をつくる。

この句の作者は、子を叱るポイントを心得てゐるらしい。ユーモアもあり佳句である。

白足袋をぬいだ宮司の飲みつぶり

(八 郎)

「白足袋」がよく利いたものだ。

どこの宮司さんもお神酒と縁があるかして、お酒は強いようだ。白足袋をはいた弥宣さんは、どこかイキなところもあって、おとなしげに見えるが、上下を脱げば、日頃の猛者ぶりを發揮する。一つの時代相を描いて、赤裸々な宮司さんを見せられた観がある。

但し宮司にも、宮司と、権宮司とあるが、これは権宮司のほうだろう。

冷房に勤めて合のズボン下

(形 水)

冷房のきいた部屋は、快適で事務能力もあるが管だが、ずっと一つ所にいると、冷えて健康をこわし勝ちだ。

合のズボン下を着込んでゐるところは、太

分年齢も進み、役職員と思えるが、こうした人達は、冷房より、扇子かうちわで涼をとる方がうれしいのである。

地味な句だが、捨て難い良さがある。

夕焼けの中から秋がこぼれて来

(求 女)

大自然の描写としては出色である。ただそれだけの観があるのは、さみしいが、又一面無限の味がある。

立秋の声をきくと、雲のたたずまいも、いつとはなしに変わり、そっと秋が忍びよって来る。とくに、夕焼け雲などには、鮮かに大気の変化がみとめられるものだが、そこから、早くも秋を感じとる作者は、敏感である。

枯れるまでほつておけないのも農夫

(旭 童)

この句は、天候に支配され、根強く生き抜く農夫のきびしい一面と、習性を感じる。

われわれの花づくり、庭づくりは、枯れたら枯れたで、あきらめてもしょうが、農夫は泣き泣きでも資本をとりかえす努力をする。

こんなことは、百姓の常識として観過されるが、実は大へんな努力だ。百姓仕事の根強よさは、枯れかけた作物も収穫にこぎつけようとする。

ここに、農夫の誇りがあるのだろう。土に生きるものの根性をみせた、佳句。

草臥れた扇子で停年らしい風

(滋 雀)

この句の「草臥れた扇子」は一本の扇子をだいに使っている。ケチな、どこかつましい人物を浮彫りにしている。

そして「停年らしい風」を煽き出しているところは、オフィスの隅か、売店の店先とか。弱々しい風だろう。どこか哀愁がただよ

う情景が目に見えるようで、人物描写は、相当なものである。

逢つてもやはり別れる人と知り

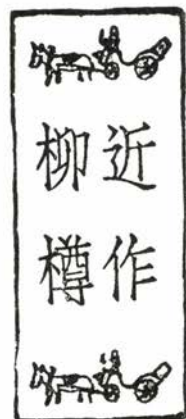
(葉 子)

男女間は、好意をもち合つても、たびたび逢つてゐるうちに、男のうつり気なことや、空々しい一面を見せると、女は、将来を頼むに足らぬと意識する。女はわりに敏感だ。

女は受け身だから敏感になる。動物でも、弱い動物ほど転身が早く、相手の心理をささいなことで読みとる。男たるもの油断はできない。

この句は、いろいろな場面を想像させ。あたかも、小説か、映画のひとコマを感じさせる。巧みな作句。





川村好郎選

大阪市小谷葉子

帯締を貰っただけの縁でした

気まぐれが当てもないのにセツトする

踊りの輪こちらで抜ける目が合図

雄草よ 私もお前の仲間なの

美人だが黒一色のつめたさよ

下関市志賀汀花

妥協せぬつもり蚊帳へも入らない

幸せを何から話そう里の蚊帳

姑来れば男尊女卑になる吾が家

涼み船の手すりに夫と手を重ね

嫁きし娘がもしやとテレビの阿波おどり

大阪市古川集一

税務署を出て秋晴れに気づいたり

秋の花隣りは庭を持つ身分

煩惱捨てて名月へ立ち向い

手ぶらで帰れば子供起きており

指切りをパパはころつと忘れてた

大阪市吾郷玲人

祝日が殖えても旗は殖えません

ころもち次第のギヤラが少なすぎ

結婚は別ヨと愛を囁かれ

メートルで買うて鯨で縫う和裁

虫鳴けど聞く人もなし埋立地

羽曳野市谷垣史好

気の遠くなるほどかなしい地平線

折伏を云い負かした日の微熱

誘惑をはぐらすようによく喋り

喋り倦いて心貧しい夕暮れ

舗道行くヒールも高く秋の音

布施市宇和川木耳

総理不図手持ぶさたな眼鏡もつ

郷愁と別に椎の実蓮の青

さなきだに秋は砥石で虫が鳴く

実篤の絵の前集金もの馴れて

沓脱は寒く靴べらあつた筈

玉島市 井上旭峯

居ずまいを直して金策らしい膝

膝の子の重み再婚辞退する

遠雷を聞いて行商まだ廻り

頃合を見計らうてる隠し芸

鳥取市 藤本佳女

車座の果てはザコ寝の祝い酒

偶然の出合いをアベックと間違われ

姉ちゃんの自覚かお乳をあきらめる

虫しぐれ女の慕情かきたてる

布施市 坂東若芽

すぐ秋だ頑張れと咲く萩の花

月に星やはり私の目に神秘

楽しさはタオルで縫えるベビー服

天を突く大杉生き通しの姿

大阪市 白井孝子

岩肌を壁塗るように紀州バス

岩風呂の奥へ背中から進み

百円で売られる前に虫は死に

陸橋で何の音聞くきりぎりす

鳥取市 藤本鎮也

胸元の自信が細いネツクレス

鼻唄が合唄になる寮の夜

捨てられても玉ネギは新芽出し

父母の恋しさ襲う寮の夜

愛媛県 関本柳剛

梅干をおいしく食べて瘦せて居り

腰低うせよと柳が言うてくれ

悔ある日 月のまるさがまぶしすぎ

熱の粥いくら食べても底にある

出雲市 竹内李羅

骨抜きにされる覚悟のドアを押し

便箋の白に真赤な恋燃ゆる

衣替えしてふるさとの山紅葉

片意地の肩が寂しく雨を衝き

鳥取県 鈴木村諷子

叱られるわけの判らぬ暑さにて

火葬場の昨日の友を焼く煙

ボーナスはないけど牛が子を産んだ

感情の動物酒を苦くする

仙台市 平野光道

まとめあげたい句トイレを出て忘れ

しみじみと秋の雨きく絹布団

ポールペンかすれて焦る恋心

丘の団地今日も眺めてまだ間借り

大阪市和田痴亭

無心状それでも母は嬉れしそう

プールからあがる肢体の娘は大人

蠅とまるそれが重たいほどにやせ

こおろぎの挽げたる脚よ恋終る

大阪市江城雄

アルバムの過去を質さぬ妻でよし

午前二時生きる屋台の灯は消えず

せめてものいたわり妻に買うビタミン

踏台になつてやつたに脊を向ける

西宮市前田芙己代

屋台骨ささえた指のしなやかさ

蟬しぐれすなおに聞けず更年期

骨惜しみしたよな便りで無事を知り

胎動を夜の浜辺に たしかめる

大洲市堀内暁風

いさかいも面子が立つてけりがつき

感謝状ズラリ並べて断られ

冗談として悪口を受け流し

出雲市王紫

セーブして鳴け情熱のキリギリス

死ねばすぐ仏になると云う安易

痩せ犬が思案の果ての廻りみち

尼崎市岡本昭三

サボテンが皮肉に僕をさしたがり

励まして呉れる日もある上司の目

叱られる度胸を決めた膝頭

大阪市小東琴女

名目は視察役得の湯につかり

表向きは借りの金だと言つて貸し

小銭だけ並らべて乞食昼寝する

広島市上代美文

短気と短気上役が先に折れ

討死に似て妻も子も昼寝

連勝のストツプ魔女でない涙

竹原市時広一路

バスからの山は昔のままで良し

迷信を信ずる母をもてあまし

参観日男はたつた僕ひとり

大田市藤田軒太楼

おまかせしますと割前気にかかり

雑談の端に覗かず無心ごと

深呼吸して検診のドアを開け

島根県 小 砂 白 汀

大見得切つて代議士ひつたくり

真直ぐに歩けば変屈者といわれ

忘れたふりして過去を許し合い

島根県 堀 江 正 朗

癖みんな覚えた妻に見守られ

初恋の思い出はたちのまま残り

池の鯉秋の女の影をのみ

米子市 八 木 千 代

我が家もうここもかしこも更年期

髪がたが気になるほどに癒え

麦茶もう売れなくなつて秋を知り

尼崎市 貴 志 千 尋

ワンマンの方がわが家は悲なし

若返つた気である妻のヘヤーカット

丹前を着ても席順もめており

鳥取市 近 藤 秋 星

迂闊にも彼女の誕生日を忘れ

婦人科の生みたい人とはうらやまし

二学期は頑張る約束もう忘れ

岡山県 瀬 戸 山 文 平

売出しへ掛けばつかりで暮れにけり

相好をくずして標準語が狂い

香魚また串ざしにされ姿勢よし

河内長野市 森 本 黒 天 子

踊りの輪抜けて若さが寄り添う夜

わたりもの同志の夫婦で仲がよく

たまさかの水撒き夕立念を入れ

竹原市 三 宅 不 朽

石もてば石もつ人の眼に出合い

誘い合うようにハラハラ散る枯葉

無視された好意少うし意地になり

米子市 林 瑞 枝

より奇麗になりたい化粧で肌荒らし

犯罪の女の膝で子は眠り

ごめんねと甘え上手に尻にしき

下関市 志 賀 木 石

若い気へ歯と目と髪が謀叛する

客去ねば主権を妻に奉還し

風と波の芸術ここに青海島

長崎市 吉 田 季 生

かげ口が奮い立たせた未亡人

ドライブのついでに墓参して帰り

横文字を知つててにせ物つかまれ

名古屋市 花 東 千 久 良

恋文にしては薄手な女文字

横文字の封書伴の初日より

啼かず翅ばず養子受けがよく

笠岡市 木 山 要 次

残酷な娯路上の一円貨

スラックスヒップの線が素直すぎ

貧すれば眨まれ貯めれば嫉妬され

七尾市 松 高 秀 峰

子の意見一応素直に聞いてやり

無理すなと新妻うれしく叱られる

高知市 永 野 舞 子

税務署の意表をついた低姿勢

立話夫へ愚痴と子のテスト

尼崎市 中 谷 利 美

すぐ泣けるように出来てるのか女

弔詞だけ聞けば ほんとに惜しい人

ハワイ上 田 紅 溪

さいさいは来るなとも云えず孫の守り

青虫をはこぶ蜂にも親の愛

下関市 千 原 さ と

小うるさい妻だけあつてよく動き

つき合いに飲んでもけじめが欲しい妻

島根県 堀 江 芳 子

老い先きを案じる母にいたわれ

細くても父の灯りを消さずほし

青森県 岩 淵 一 星

屑林檎豚に食われる肚をきめ

身長を誤魔化すパーマ盛り上げる

奈良市 村 上 春 己

心臓の強さ手ぶらで無心に来

稲妻に浮く大仏殿の巨きさ

米子市 石 垣 花 子

砂利とりに荒らされてなお月見草

さからわず筏師流れにうまく乗り

倉敷市 水 谷 谷 水

ここだけの話ここでも聞かされる

皿洗う水夫夕焼け色となり

羽曳野市 杉 本 白 扇

無心ではないかと帰省を疑われ

一力年足ぶみをしている療養

竜野市 森 下 峰 子

別途収入そんな或る日をおごらされ

再会へ雨の情緒も心良し

西宮市 船 津 千 夏

道づれのあのひといすこ旅想う

娘十六 虫の声には耳かさず

羽咋市 三 宅 ろ 亭

手がかりがなくて疲れた顔が寄り
体験をきかせる方が感激し

大阪市 武居寿美司

雑草でもよしここがみどりなら

すすきの山ひとり行く夢見る疲れ

善通寺市 伊藤藤歌子

敬老の日やつと旗日の仲間入り

宮古島の惨事寝ながら見るテレビ

高知市 田山文子

特売所女の性をのぞかせる

取引のもつれ受話器が音をたて

桜井市 岩本雀踊子

頼もしく育った子供の口ごたえ

笑顔で叱る義理を考える

大和郡山市 中内孚彦

関門トンネル

地下六十米暗い灯が気にかかり

鐘乳洞持つて帰れたらとまださわり

笠岡市 高木洪柿

豆腐なら義歯の調子の悪くとも

金魚鉢まぜ返してる三才児

島根県 石田清泉

庭池の金魚も落付き見せて秋

素直さも反抗も子に望み

広島県 高橋鬼焼

海に生き海をおそれぬ肌のつや

口べたの父をしやべらす参観日

八代市 永松道雄

殉教の魂が通う夢の橋

連の花かおりが誘うお堀端

大阪市 西本保夫

ロマンスの無い結婚だった愚痴

昼食代請求ハンが三つ要り

高知県 山川勝子

打診した西瓜誤診でないうまさ

猫の額の畑アパートに羨まれ

大阪市 石田麻沙吉

週刊にもて遊ばれて消えた歌手

消防のサイレン遠し寝るとする

千葉県 鳥飼春泥

育児書で明治と昭和もめており

ビタミンの世話になりつつ瘦せており

倉敷市 水粉千翁

ベトナムのどつちの無理へ手をあげる

テーブルを叩いて叫ぶほどでなし

愛知県 横紫光

母の齢もつたいないがまた忘れ
散髪屋出てから秋の深さ知る

カルホルニア

斎藤流路

美容院に行つてきたような妻
その顔をカラーで撮つても同じこと

八幡浜市 山本初音

嫁つた娘の辞書の手垢もなつかしく
儲け口まとまりきわに水さされ

宇部市 櫛部いさ夢

実行はどうか話は堂に入り
拍手したら謠曲まだつづき

八幡浜市 別宮すき

最高の微笑 花嫁下をむき
被爆者のニガ笑いに顔そむけ

松山市 西川みやこ

流行の水着に気になる灸のあと
新学期ママの時間がやつともて

竹原市 小島蘭幸

母の眼を見て安心をして眠り
新入社まだ気疲れだけの椅子

八幡浜市 菊池美香

ハタタリが聞いたか押売荷をしまい
掛売りがまだ黒板から消えず

尼崎市 平井露芳

短波とは寄せては返す音で鳴り
ラジオもう合唱になるフアミリーカー

京都府 菊沢破天

魂胆のある盃が又たまり
糧を得る車へ子等の待つ姿

寝屋川市 福富隆子

コオログが座敷の隅で鳴く故郷

高槻市 山田スミ子

鳴かぬようになって蟬は捨てられる

東京都 浅野竜泉

ライバルが休み社内の味気なさ

島根県 大森孝華

休日の昼寝と蠅は知らぬらし

茨木市 高木繁太郎

半袖のボリスへ無事な夏が暮れ

堺市 羽田一扇

月賦でも良いと値引きしてくれず

堺市 森藤亜也

処により俄雨なる程降つて来た

仙台市 川村映輝

利益配当制限された分は飲み

大阪市 橋本 緑雨

大洲市 米沢 曉明

・ 詠 ・

悔いても悔いても仕方のない歳の差
こおろぎがここで鳴いてたさがす朝
こおろぎの鳴いてる方へ浴衣着て
すすき持つて秋をたのしむ友に会い
おはぎについてぬけた入歯かな

須坂市 高峰 柳児

・ 近

ホステスの気焰は振られた恋ばかり
うす暗いところで国宝にある値打ち
おみくじを信じる石段軽く降り
花嫁修業で糸切歯日を重ね
それた台風へ落つくいい軒

今治市 長野 文庫

サムライの斬捨て御免的文化
風でなく新らしい葉が葉を散らす

直原 玉青 著

「新しい南画と俳画の描き方」

出版社・創元社

価三〇〇〇円

パトロール清らかな恋へふりむかず
お月見は学校で絵を書いただけ
仲人もいささか酔うて日が決り
松山市 月原 宵明
脱走のように二次会から逃れ
平凡のその幸福に気がつかず
くしやみして急いで肌を隠す秋
小松市 山上 千太郎
空地雑草心冷たい有刺線
腹立ちの声のふるえを齢に恥じ
名古屋市長谷 川 鮮山
旅づかれただこの上は寝たいだけ
のし紙の裏金額は〇五つ
世に遅れまいとポケツの週刊誌

玉青画伯は南画界の重鎮として、また俳人としても著名なることはひろく世に知られ、わが「川柳塔」には創刊号から表紙に麗筆をふるわれている。南画の基本からはじまり俳画の妙訳を説き他に類例のない内容である。

★11月初旬発売ノ本社でも取次ぎいたします。

泰山の租妻



東野大八

中国の山西省に泰山という立派な山がある。

「泰山に上りて天下を小とす」と孔子もいつている名山だが、われわれは

泰山鳴動してネズミ一ピギ」という言葉の方がずっとおなじみである。泰山にはネズミなどいない。居るのはコウノトリと岩つばめとワシとコジュケイ、それに時として美しい丹頂ヅルがカツボしている。

砥石のように青く冷たい岩々とハチ植の松のような木々がオツにすまして生えている。

峨々たる重畳とは、漢詩の表現だが、泰山は幽谷の靈峰はるけきものである。峨眉山は仙人だが、この山には仙女がすむという。まるで小島功のマンガにある「仙人部落」みたいなのがふんだんにありそうな山だ。

あるとき、済南の友人とこの山に上つたことがある。「泰安」という駅で下り、ブラブラと山に向う時は中秋。

この山の中腹には、画棟飛雲の形容そのまの一字の伽羅僧堂があった。ここへ入り込んで一夜の宿を乞うた。宿泊料を払うのだから、先方さまもサービスを惜しまない。白菜とゴマみそをまぶしたトウフをもつてきて、チップをはずんだら白酒（バイカル）が現われたのにはビックリした。

住職か雇い僧かしらんが、俳優の左卜全みたいな老僧が坐りこんで、こちらのバイカルを心やすく口にふくみながら、斗母宮の話をしてくれた。

斗母宮とは、この山向うの中腹にある尼寺のこと、ここには二十数人の尼さんがいて旅の人とみれば、場合によってはトギもするという。この話に

「勿体ない、そういうことならそちらへ引越す」

とわれわれは腰を浮かせたが、イカンせんそこへ行くには往復三日を要するときいて、

とうとう断念せざるを得なかった。

それにしても、尼僧が心やすく、どここの馬の骨とも知れぬ旅人のトギに出るとは、どうしても意にそわないので、その帰途、済南鐵路局資料課にいる藤沢由蔵を訪ねた。

この男は、聊齋志異のその聊齋の研究家でせつせと社費、公費で目ぼしいところを、八方にとびまわり、その中間報告を朝日新聞に書いたが、まだまだ、不足をかこっている男だ。

「ああ、泰山の尼寺ね、わしはとっくに引ってきたよ」

とコトもなげに彼はいう。なぜかって聊齋の志異は、泰山の麓で書かれたもんだからだ。

聊齋は、スゴイ頭の切れる秀才だったが、他の連中のように係り官へワイロを贈らなかつたので、何度進士の試験をうけても通らない。業を煮やして彼は、憤然と郷里へ帰り、

百姓相手に、お役人の悪口ばかり言って一生を終った。

泰山あたりの村々には、彼の半折や色紙、扇面が至るところに残っていて、その即興の戯筆は、すべて官罵吏嘲のうたにみちみちていた。

「わしは、この聊斎の残したもろもろの戯筆に、土謡と命名したが、どうだいいアイデアだろう」

と彼は小鼻をうごめかす。

「聊斎も結構だが、早く斗母宮の話をしろ」と私はさいそくした。

「尼寺斗母宮には、かつて二百人からの尼がいた。男は十人もいたのだが、すべて官刑を受けた男としての能なしものばかりでね」と彼は、やおらあってその斗母宮の話を口にしはじめた。

さて、その二百人の尼さんだが、下は十代から上は六十歳までいる。彼女らは村々の人々から乞われると、喜んでその家々へと出かけていく。乞われてという点が、最も大切な点であって、その赴く家には子供がないので、それを作りに出かけていくのである。仏門に仕えるひろやかな心で、尼さんたちは、身体を村人にささげて悔いしないのである。

二十代、三十代の女盛りの肉体だけに、家に入るとアッというまにオメデタというののもあれば、二年たっても手応えなしというののも

ある。子を産み、山寺に帰ると、その尼さんには仏さまの近くに坐れる僧階の上座を獲得できるわけだが、二年たっても三年たっても子が作れない尼さんは、しおしおと山へ戻りもう二度と里へ下りることを許されない。この制度を人呼んで租妻（かりづま）と名づくとある。

「わしは、子を産まずに帰る尼さんより、子を作って山に還る尼さんに涙をそそられる。一人の男を夫と定め、妻とよばれ、そして子を作った。山へ帰るその心は、夫のきぬぎぬの別れもさりながら、血肉をわけたわが子への哀切は、果してどんなものがあるうか、つらく悲しく、身を崖上から谷へ投じた尼さんといったところからね」

藤沢はそういって、ガサガサと引き出しをかきまわしていたが、やがて一枚の紙切れをみつけ出し、いか、オレは哀れな租妻の姿を思いうかべるあまり、こんなうたをよんだと声を出してうたつてみせる。私は今もそのうたの一区切りをありありと覚えてるが、こんな具合のものである。

わしも人の子

租妻なれど

人の情は知る女

人の肌身で泣く女

なんで山なぞ、帰らりよう

でも、お祖師さまの
眼が怖わや 眼が怖わよ

あまりうまくはないが、彼のうたは、こんな調子でエンエンと長いのである。

藤沢の話は、まずこの辺までとして、そうした変った尼寺がこの世の中に存在しているかどうか、さきの老僧の話や、藤沢の調査の中には、明らかにその存在事実が立証されている以上、私はもはや、反バクの余地をもちない。

私は再び彼の地に渡る機会をもてば、忼然と「泰安」の駅に向いたいと思う。それは下卑た女体への関心というには、あまりにも事実が厳シユクでありすぎる。人の世が、宗教と結びつくとき、女はそのように、至極安手な、そんな肉体の因縁に、自らをさらけ出していくものなのかどうか、それが確かめてみたいからでもある。

路郎川柳手拭い

子沢山僕のまぐらは何処へいた

定価 百 円

送料 二十五円

川中島合戦

富士野鞍馬

甲斐の田を越後の鎌でかりたがり

(一〇四)

越後の上杉謙信と甲斐の武田信玄とは、いつも信濃の川中島の辺で合戦した。それは前後五回に及び、

天文二十二年(一五五三)十一月

同二十三年(一五五四)八月

弘治二年(一五五六)三月

同年八月

永祿四年(一五六一)八月

とであった。(日本外史)

天文二十二年(一五五三)五月、信濃の村上義清が謙信の下へ逃げて来て、信玄が領地を侵すと訴え救いを請うた。それに応じて謙信は、兵を進めて、十一月信濃の川中島で信玄と合戦したが、勝負はつかなかった。

しんけん勝負川中でおっはじめ

(九九三〇)

天文二十三年(一五五四)八月、謙信は再

び信玄と川中島に会し、謙信は單騎信玄の本陣へ跳り込み、信玄に斬りつけた。

甲斐にあつきをぶっかける大さわぎ

(一〇三九)

川中であつきがゆ喰ふひどい事

(安六義四)

小豆が勝って赤くなる甲斐の色

(一二三二六)

大あつき団扇へあける川の中

(五八一七)

その時謙信の太刀は「小豆長光」という三尺二寸の銘刀で、信玄はそれを軍扇でうけたが腕に傷をうけた。川柳はその太刀の銘の小豆にかけて戯作している。

川中島はしんけんの勝負なり(七九二)

抜かぬ太刀とは甲州でいひはじめ

(拾五二三)

「抜かぬ太刀の高名」という俚諺を、信玄が太刀を抜かなかったのに附会している。

川中のきずへもらったしほがしみ

(安五鶴二)

信玄は謙玄から塩の供給をうけたことがあ

ることをうがっている。

原大隅が、謙信の乗馬を突いたので、馬は駆け出し、「流星光底長蛇を逸す」と頼山陽に詠まれている。この時も勝負なしであった。

弘治二年(一五五六)三月、三度目の合戦

となり、謙信は、甲斐勢が、夜、飯を焚く煙を見て、すぐに八千の兵をととのえ、未明に信玄の本陣に攻め入った。

おひだきを見てけんしんは小うなづき

(一三三三)

そして越後勢は、車がかりの兵法で攻めたので、

ぜんまいの車で武田押倒し(六三二九)

ぜんまいの仕掛を武田気が附かず

(一四九二〇)

武田の仕掛ぜんまいに崩される

(一六三三)

川中のからくり武田大はたき(五九二五)

武田の仕かけ川中で大はたき(六一六)

それを竹田のカラクリの人形にいいかけて詠まれ、

越後勢廻り燈籠のやうに押し(七六八)

痴盲録(3)

高 鷲 亜 鈍

尾道に移って丸一年経った三十九年三月二十九日、わたしは二つの目的をもって上阪することを思いたった。その一つは(株)O・S・Kに就職した件を、よろしくお願い申しますと、その会社の社長であり、拙著「詩川柳考」の後援者であった、柳友大坂形水氏に直接会って、御挨拶したかったこと。第二は、その一年間ですっかり眼がいはなくなり、原稿はおろか、手紙や葉書が読めも書けも出来なくなつたので川柳(私としては詩川柳)の実験作、約千句あまりの句稿を持参して、私を知る誰かに批評を乞うためだった。そしてその目的はほぼ達した。しかし私は思いがけない二つの目的を併してもなお足りない、大きな喜びを与えられたことは、形水氏から聞かされて、偶然、当日阿倍野松崎町で、十三周年記念大萬川柳大会があり、御病氣が中ではあるが、路郎先生も出席されるということで、形水氏の車に乗せられ、飛ばした。「尾道にも帰ってみたいんだがネ」と先生のお言葉。「ハイ。先生が墓参に帰りたいと昨年お便りをいたしたとき、心待ちしていたんです

が」と私の返事。「それが近頃身体がめっきり弱ってネ」と。なお先生はいよいよ、「川柳雑誌」は今度一切若いものに任し河野春三氏を編集部に迎えて再出発するとか先生の話は尽きず、そのうち第一部の大会が終り有志の懇親会が始まることになったので、何度も私は尻をあげかけた。が、先生は私を引き止めるようにして、次々と語られ、それを心残りしに思いながら辞したがそれが先生とお会いし、親しくお顔は拝せぬまでも、目のあたり肉声を聞いた最後であった。あの細い錆のあるきれいなお声はもはや聞かれない。その路郎先生の出生地の尾道に、墳墓の地ときめた私を、奇しき因縁とやいわんである。

☆

こうもりの翹 べったりと目を掩い
開眼すとも夢はこころにもてるから
秘密の公開 地獄のうたをきけ
錠剤とわから へのひらにのせてみた
鱧くちやの顔みえなないのもまたよろし
トンボの目を刺す悪童のなれの果て
平気です 時計 眼鏡を忘れても
恩にきる人ふえるばかりでやりきれず
生き生きと声に抱きつくように握手した
友情が空の瞳をうるおわし
女房の手荷物となる汽車の旅
同情票は盲人を持った女房へ来
辛抱して盲夫に肌をさわらせる

川中へ車を出す越後勢 (二一五三)

越後の車に甲州の馬は逃げ (二三一九)

川中へかした車はかんちがひ (五五五七)

その廻り廻って寄せてはかえず車掛りの軍
法状態も詠まれ、
片目だけ車がかりを見そこない
(安七桜 4)

越後勢初手は片輪と笑って居
(明二義 3)

越後者一つ眼の首を取り
(四六三九)

その時、武田の軍師山本勘助も戦死した。
勘助は片目、跛足であった。

勝どきに甚九も交る越後勢 (一三二一七)
越後のけんしんかけね無しのいくさ
(一七一七)

などとも詠まれ、そのあとで越後勢は甲斐軍
に挟撃されて敗退し、これも勝負なしであつ
た。

その年の八月に、また川中島で、甲越戦つ
たが、一進一退、ついに駿河の今川義元の幹
旋で和睦したのであった。

それから五年経って、永祿四年(一五六一)
八月、謙信は、信玄が越後の国境を侵したと
いうので、怒って兵を出し、所々で相当の激
戦があったが、両軍とも兵を引いた。

たがいせん定石をうつ甲斐越後(五五二四)
ここで争った武田は源氏、上杉は平氏とい
うこともまた、源平の宿縁というものか。

いのちある句 (6)

戸田 古方

川柳の世界でも句と文の組合わせによって相当長いものがかかれていきます。この場合、詞書あるいは説明から作句する場合と、すでにある句、できている句から物語を展開しようとする場合と両方あるようです。このように句と文と組合す程度のこと、現在の段階では限界であり、常識であり、無理のないところかとも思われます。しかし、私は、それで辛抱が出来ないのです。それで、皆さんと一緒に考えて行きたいので、少しそのような実例をあげて研究の材料にしていきたいと思う次第です。

「川柳雑誌」二一五号といえは昭和十六年十二月、太平洋戦争の始った時です。しかし誌上にはまだ日華事変末期の段階です。この「川柳雑誌」の目次を見ますと、

吟行地調べ「奈良篇」(二〇〇) 麻生路郎

川柳「世界史」(二〇〇) 戸田孤蓬

川柳「仏説阿弥陀經」 戸田孤蓬

(二〇〇)といふのは一〇回目ということで、孤蓬は私の旧号、自分のものばかり出す

ようで恐縮ですが、自分のものの方が扱いやすい、責任ももてると思ったからです。

この三篇はいずれも詞書散文があり、そのあとに句がならんでいます。

狸々を彫る人形師少しいけ

路郎

奈良人形刀の狂ひへ彩をつけ

葎乃

小器用になって淋しい奈良人形

アート

奈良の宿鹿の土産を床に置き

路郎

魚佐龜佐池を囿に客を引き

路郎

いずれも「吟行地調べ「奈良篇」の句、前の三句は奈良人形、あとの二句は奈良の宿の句です。それぞれ詞書がついています。案内を兼ねていきますので、現況から、歴史に及び両方とも一千字を超えますので略させていただきます。この企ては戦争のため続けられなくなりましたが、路郎先生は身近から始めて全国に及びたいといっておられました。すでに出来ていた「奈良篇」だけでも相当長いものになっていました。調査の行届いた詞書は、詞書とはいって先生の名文になるもので、お互に文と句が助け合っているところは奥の細道を思わせるもの、奥の細道に近代文学のいぶきを吹きこんだかに感ぜられます。

「世界史」と「仏説阿弥陀經」は川柳へ馳け出したばかりの私がこの前年「川柳二千六百年史」を手がけ、余勢をかって世界史に及んだ次第で、原稿からはじめはしたものの、これも戦争で十九世紀のなかはずぎで切れたままになっています。又、阿弥陀經の方は、この年に私の父が死んで、満中陰の日にかき

上げたものでした。阿弥陀經の紹介という柄にもないことをしたわけです。「奈良篇」と同じく詞書をつけています。ことに世界史の詞書はとてもお粗末なもので、それを読んではじめて句の意味がわかるというようなものが多いのです。

仲達はその臆病を肯定し

竹林は今日も清談だけですみ

長恨歌女を産めと教えたり

ちようど東洋史の三國史から唐へかけての所なんです、詞書の前書なしにわかる句をみつくるのにフウフウです。

「川柳仏説阿弥陀經」の方は読切りですし

經典ではありますが、一篇通じて発表しておりますので、少し手を加えて、全文の様子をお目にかけようと思います。

(一) 道は一つ

闇を照すものは光である。闇を知ればこそ清盛は陽を呼び戻そうとした。変らないものへ、壊れないものへの憧れ。

燃え移る軸木と問答してみたい

(二) なむあみだ仏

この世の中で「お母ちゃん」程いいものはない。なむあみだぶつは生前、死後を通じて母の名である。その母の名をそのまま経の名として。

イロハだけ書けて啞の子「オカアチャン」

(三) ふるさと

母とくらせるふるさと——極楽とはあみだの世界である。あみだとは無量寿——限りのない生命ということである。

無量寿を抹香臭くきき流し

四 しあわせ

持てば持つで、持たねば持たぬで思うようにならぬこの世。つきについて心配して下さるのが母。心の母様が心の眼に知られたときどうしてその名をよばずにいられよう。

近づいてみれば青芝禿だらけ

四 ふるさとのくらし

母の名をよべはふるさとが眼に浮ぶ。極楽といえはみせるとせがまれる

四 はの心

焼野のきぎすではないが身を殺しても子を守ろうとする。

赤んべをすればするほど可愛い手

あの日から

——中島生々庵先生に

田中美喜子

九月号の貴重な紙面をおさきいただきまして、田中鳴風哀悼の記事をのせてくださいま

したことを御礼申しあげます。

路郎先生との語らいの日がしのばれまして涙あらたなものがございました。月日の経つのは早いもので、はや七七日も間近となりまして、おどろいて御社にお手紙を書いており

ます。

毎号、お立派な「川柳塔」をお送りいただきましたまして御礼のことばもございません。ずっと鳴風は貧血症で養生中、心ならずも失礼ばかり、当方の柳誌も私一人にてとてもお目にかける勇気もなく、そのままに打ち過ぎておりました。

今回の鳴風死去にて一段と何も手につきませずぼんやりとした日日を送っております。なにとぞこんごもお見捨てなくご指導たまわりたくお願い申し上げます。

なにとぞお目にかけるものもございませんが、拙著「真樹」ご高覧仰ぎたく存じます。なんとか鳴風を慰さめたく存じまして、つまらぬ記事をまとめてみました。すでに出来上がりしました時は意識もはっきり致します。入棺の折、そっと入れたばかりでございます。

「馬鹿なものを」と叱られずにはすみません。たもの心残りでもございます。

霞乃先生には、しばしばおやさしいお便りなどいただき、路郎先生をおしのび申しあげ

るよすがとなっております。(九月八日)

田中美喜子著随筆集「真樹」(限定版)

発行所 熊本市清水町亀井六一六

川柳研究会

★著者は鳴風、田中辰二氏夫人で、川柳句集「ひと」や、ずいひつ「ビシンのカーネーション」などの著書がある。

私のメモから

吉田水車

その時々思いつきや見たりしたこともをメモして置くのは誰かがするところで、私もその一人であります。折にふれ整理するのも興味深いものです。

その内一つに川柳の大先輩の学歴が妙に商業出身であることがおもしろいと思ひますので披露いたします。

麻生 路郎(大阪高等商業)

川上三太郎(大倉商業)

岸本 水府(大阪成器商業)

前田 雀郎(宇都宮商業)

石曾根民郎(彦根商業)

大阪高商は今の商大ですが、同校出身のもう一人の異色としては劇作家の木谷逢吟が。つて、その夫人は美人画の画家で有名な木谷千種があった。以上はなほだ乏しい集録ですが機会があればもっと沢山の方々に調べたいと思ひますが、なお御教示下さるなら幸甚です。



亡父・長野井蛙

(本社同人)

遺児 長野 尚子

父は昭和四十一年七月二十五日に県立中央病院で永眠いたしました。病名は胃癌でした。

井蛙は明治三十二年三月十八日生まれで定年まで国鉄におりましたが、退職後は国鉄の紹介で小郡駅弁会社にはいり、昭和四十年六月まで勤めました。旅行と川柳が好きでしたので私たちの「好きなことをしなさい」との意見を入れて駅弁会社を退職したのです。

会社をやめてからは句帖をポケットに毎月のように旅に出ていました。ことしの一月に自覚症状が出たため診断をうけすぐ手術をしましたが手おくれでした。

三カ月目に退院して一カ月間家で静養しておりましたが(とても元気でした)五月に再入院しました。そのころから一日と悪くなり七月二十五日に死にました。本人に病名は知らさずじまいでした。私たちも一生懸命でしたが本人も一生懸命にがん

ばっておりましたのに……。

死の一カ月ほど前から句を書いておりました。

病中苦吟(遺句)

注射タコ 撫でつつ癒ゆる日を信じ
はかなき希望は今日も暮れゆく
ともすれば絶えなんとする命の灯
消すまいとしてひたすらに耐ゆ
苦勞して育てし甲斐あり次々と
ベッド訪う子に心強まる

入院中にいろいろ作句していましたが、枕元のノートに「病中苦吟」と書いたところは、やっと文字が書けたという、たどたどしさでした。

(遺族は妻ツヤ子、娘康子、尚子の二人。喪主の兄は職勢の関係で別居です)

★

川柳塔創刊号から九月号まで野心みな捨てて平和な井の蛙

良い服と

悪い服

谷沢好祐



戦時中私が勤めていた小造船所の労務課長の話である。この人は余り服装にこだわらない人であったので、つまらない服を着て時の勤労動員署へ行った。ところが、
「お前のような者では話にならない」と言われ、さらばとてバリッとしたよそ行きなる一着を着用に及んで行くと、
「こちらへどうぞ」と鄭重に扱われたと言う話がある。

他位は服装によらないが、良い服を着れば偉く見えるものである。俗に、「馬子にも衣裳」という。どんな美人でも、ボロボロの着物に汚い顔をしていては美人には見えない。また正月はどの女もみな美人に見える。これはとっておきの着物を着、さらに入念なる化粧によるためでもある。私ときでも散髪しネクタイを締め、他所行きの物を着用すれば一枚ぐらいは上がであらう。

川柳においては、良い服を着れば美人に見える。字が上手であれば汚い句に見えることは同様である。併も選句は短時間でやるので

筆の目崩して目出度い荷が届き
えくぼでは効なしと見た泣き落し
無い袖もふれる政府の隠し金
集金を大塚そべて寄せつけず
手術台笑った仏の名も唱え
院長の回診正座して迎え
いつ散るも悔なしさくら咲きほこり
ひやかしをあっさり負けてあわてさせ
磐石も金のテコならすぐ動き

再入院
注射針御免なさいと場所を替え

故・井蛙君に想う

国弘半休

享年六十七歳で他界した井蛙・長野元一氏はその人生の殆んどを独眼で生きて来た事務屋で、もしも彼に二つの眼が完全に輝いていたら彼の地位も財産も幸は倍加したであろう存在であった。

性来温厚な君の句には寸鉄肌を刺す凄味は無いが自ら「井の中の蛙」と謙遜して、その実なかなかの博識多才、人情の機微を捕えた彼の句はしばしば故路郎師の認めるところであった。

×××××好んで各地を旅した彼の晩年はその殆んどが人情風俗の旅日記で字写真と共に今は遺品となったその記録とアルバムは彼の書架に余すところが無い。

屋島にて

人混みを尻目にお金駕籠を抜け 井蛙
等は彼が永年の勤労生活に終止符を打って小乗の人生観より大乘へと上昇する雲水の心境ともされる。健康に坐折してから（一月十七日県立防府病院）入院してからの「注射だと無でつつ癒ゆる日を信じ、はかなき希望に今日も暮れ行く」「ともすれば絶えなんとする命の灯、消すまい」としてひたすらに耐ゆ」の詠詩の中に生への執着が溢れ、小康を得て後（五月二十三日入院）再び斗病生活に這入ってからは

「惜からぬ命なれ共まだ二人嫁かぬ娘のあり心惹かる」「氣遣いてかわるがわるに訪う娘等の、心安らぐ笑顔作らむ」と再起不能を意識しながらもなお且つ子の父であることの愛着が縷々として脈打っている。

斗病久しからずして薬石効なく病院で往生した彼の葬儀は形の如く肉親知己に守られてしめやかに取り行われたのであるが彼の死出の旅路に餞けた柳友の句帖と短冊は彼の遺影を埋めて

旅に出る蛙 柳に見送られ

峯堂

今日からは井蛙の声もなれ淋し 句丈
等々涙を誘うものばかりで一ばいだったう彼には家外賑やかな船出ではなかったろうか。

漸やく四十九日の法要も済ましほっとした気持ちの中での遺族の方々、特に二人のお嬢さんの心境を察する時、そこに掲げた路郎師の「俺れに似よ」の父性愛そのままだ彼の面影が折りに触れ時に臨んで彷彿し朝な夕な瞳を濡らすのではなからうか。幹折れて梢にかかる霜寒むし 半休

あるから、拙い読み難い字は損である。と言つてもまさか巧い字で書いても、没句が天になるという事は無いが得な事は事実であるう併し「句は字ではなく、あくまで句である」字の巧拙は問題ではない。誰もこう言うであらう。私もそう思っているが誰でも上手な字の句の方が見易いし、上手な字に感歎と畏敬の念を持つものである。この念は私のような悪筆者に更にある。

もし「うどんそば」等の看板の文字が金釘流であれば、如何においしくともまずいように思われるだろうし、また下手な上に誤字だらけのラブレターなどは正に艶消しで、落語家の種になるだけである。だが悪筆を能筆にするには一朝一夕の努力では出来ない。努力のみでなく手筋、即ち天分も大いに左右するであらう。

要は悪筆は悪筆なりに綺麗に丁寧に読み易く誤字のないように書くべきであらう。

第一回

川柳書道作品展

とき 十一月三日、四日、午前九時～午後六時

ところ 西宮市鳴尾公民館。

東洋・路郎・腹乃・紋太・塊人・竹二
水府・孝三郎・生々庵・栞・白柳諸
氏の揮毫作品を展覧する。

主催 鳴尾書道グループ

明和川柳研究会

勤 勞

川 竹 松 風 選

勤勞にプラスアルバイトで儲け
 勤勞にスクラム組むと組まめのと
 実働は昼寝も入れて八時間
 腰一つ叩いて鉄の手を休め
 まだ若い気でも勤勞身にこたえ
 勤勞の結晶税務署しほりに来
 勤勞課につとめ野球部の選手
 勤勞を定年制が邪魔をする
 激勞も忘れ茶の間の明るい灯
 勤勞の父に遊情の子が生れ
 勤勞の夫婦へ重い穂を垂れる
 勤勞をねぎらう酒を掬み交し
 勤勞の意欲へ思想邪魔をする
 働いた夜のお酒は違う味
 明日も又働く酒のうまいこと
 駆け出しの勤勞大きな夢を抱き
 勤勞の誇り落目も苦にならず
 勤勞の苦楽を分ける共稼ぎ
 アルバイト勤勞の味ちよつとなめ
 勤勞の留守を預る哺乳瓶
 天職を愛す手足のよく動き
 勤勞の窓に乏しい秋の空

初野 野迷 無聖 魁光 瑞枝 舞人 清月 秋子 花子 藤波 愛鳩 七面山 保夫 童泉 不水 鎮也 弥生 佳女 文二朗 惠一朗 水車

勤勞の今日はうれしい湯につかり
 勤勞へ母のモンペはよく似合い
 働ける倅せを知るコッパ酒
 誰がどうするか勤勞感謝の日
 能率と別に勤勞奉仕団
 満ち足りて明日働ける汗を拭き
 勤勞は夜中文筆業とする
 勤勞に山の現場の水の味
 ニコヨンの汗へ夕陽が美しい
 勤勞の疲れの膝でまださわぎ

佳

青白い秀才勤勞馬鹿にする
 労働歌唄い勤勞楽しそう
 結ばれた恋勤勞者の二階借り
 勤勞の疲れ夜学の灯に忘れ
 白魚のような指して労働歌

人

勤勞の汗をメーデーにも流し
 ニコヨンの汗の代価を知るや君
 新聞少年に卑屈な影が見当らず

天

李朋 李朋 金三 李朋 金三

ピンセツト

内 藤 き さ 子 選

押入って痛みゆさぶるピンセツト
 傷口でやくざと知ったピンセツト
 ピンセツト大の男をこわがらせ
 ピンセツト持てマニアの中へ入り
 怪我の子へピンセツト泡をふき
 無造作に盲腸見せるピンセツト
 ニキビ一つへ執拗なピンセツト
 選別に真珠も踊るピンセツト
 標本の綿へ順ありピンセツト
 トゲの先をつまみかきピンセツト
 ピンセツト一カラットきつと抱き
 分解をしてピンセツトへ用が出来
 先生のようにはゆかぬピンセツト
 ピンセツトの先古代のネックレス
 ピンセツトもう用のない菊に佇ち
 ピンセツト目を閉じたま口を開け
 ピンセツトで消毒をこ手でつまみ
 ピンセツト精密工の目に疲れ
 ピンセツトの息とのえるピンセツト
 ピンセツト千年の壺復元し
 これがわざわいしてピンセツト
 ピンセツト備えるほどの切手趣味
 目の疲れピンセツトを持ちなおし
 ピンセツトとうとう栓を突き落し
 体から遠くピンセツトを使い
 男でしよう手荒なピンセツト
 やつ芽が出た出たピンセツト
 ピンセツトまだ何やら触れて

句楽坊 保夫 千代 みや子 瑞枝 醉夢 芳子 双楽 金三 七面山 李朋 季賛 水車 清泉 亜也 宗太郎 代仕男 涼人 どんたく 十九平 十九平 芳仙 芳仙 静水 静水 古方

盆栽の苔手入れするピンセット 古方
あつけなく掴みピンセットを投げる 千翁
馬鹿らしいよピンセットが狭み 千翁
ピンセット或日活字を逆に植え 光郎
下駄上げる一役もありピンセット 光郎

佳

ピンセット渡すナースの腕まくり 初甫
天皇を猫背にさせたピンセット 魚山
クラブ振りすぎた震もピンセット 奇童
青ざめた顔を集めてピンセット 奇童
ピンセット退院許す音で置き 奇童
真珠選る今日幸福なピンセット 十九平

人

針箱の中で邪魔するピンセット 木魚
もう一ぺん切るピンセット 静水

地

天

おおげさなこれと触るピンセット 古方

聞き込み

吉田水車選

どうしても聞き出すものコップ酒 奇童
聞き込みに日記一と役買うて出る 美巳代

佳

こんな人來ぬモンタジューを見せ 章雅
聞き込みの行商風がよく似合い 芳仙
聞き込みを帰えしてからの内輪 かつみ
聞き込みへ真面目一点張りでした 瑞枝
聞き込みへ初めて知った娘の素行 佳女
聞き込みを握り潰してやる情け 白江
聞き込みに盛り場を縫う私服の眼 光郎
聞き込みのようにセールス疑われ 木魚
聞き込みを信じ取引見合わせる 古方
聞き込みとは知らずうかつ話 季賛
求人旅へ聞き込みはかどらず 保夫
聞き込みの刑事飲めグラス持ち 舞子
駐在が聞けば聞き込みかと問われ 弘朗
聞き込みの刑事の肩を濡らす雨 七面山
聞き込みへ刑事すぐには飛びつ 十九平
聞き込みへやうと浮んだモンタジュー 磯山
聞き込みでぐっと狭まる捜査網 軒太樓
口の固いのが聞き込みに疑われ 芳朗
聞き込みの下手な愛想も言ふ飲み 代仕男
聞き込みにねばられている言葉尻 涼人
聞き込みへ元大臣も浮かぶなり 鎮也
聞き込みで事件のあったことを知り 芳子
聞き込みへ別の事件が浮いてくる 愛鳩
聞き込みは裏返ししヒントを得 不水
婚約をはや聞き込んで来た家具屋 いさ夢
聞き込みに手がかりもなく星仰ぐ 明子

恵二朗

聞き込みが小声となつてからのメモ 秋月
あてにせぬとこでとえらうと聞き 素身郎
はしご酒聞き込みらしいに出合い 光道
聞き込みが悪いと言つてもあきらめず 俊爾

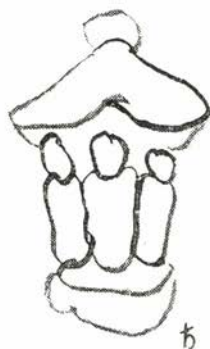
★

聞き込みの声つまらぬ場に出合い 水車
ご投句にはなるべく原稿用紙か柳箋を使
つてください。
(編集部)

ココロ
便箋

初歩教室

題「親」



菊沢小松園

実に色々な親の、色々な姿を見せて貰って
私自身、親として考えさせられたことに、感
謝している。先ず、学校と親の句である。

PTAに親馬鹿日暮まで残り

親馬鹿の見本もまじるPTA

親の方ばかり見ている参観日

手を上げぬ子へ目をそらす参観日

絵日記を親にまかせて蟬をとり

教育ママの半面を、冷めたくついている、

度の過ぎた熱心に、冷笑している作句者の

顔が、第一句、第二句とも、見える。第三句

は学校の参観日である。親が気になって、落

ちつかぬ子供が、親の方ばかり見ている、子

供の心理がよく現われている。第四句は、同

じ参観日の親の気持ちを書いて面白い。第五

句、先ず健康を願う親ごころがよく出てい

る。いわゆる絵になる川柳と言うところか。

四十才親から見ればまだ子供

親の見栄子供のごころ踏みにじり

子の嘘を聞いている母の哀しい瞳

親のスネ骨ばかりなり子沢山

川柳は短詩型であるから、なるべく余計な

文字や、重複する意味の語は用いない。簡潔

と省略、切り取り削り取って、その場の句に

一番適当な、動かな語句を、見つけ出さねば

ならない。わが子と言え、ことさら親と断

わらなくとも判る、言わずともよい余分の語

句が、入ると必ず句のどこかに、力の弱い迫

力のないものになり勝たぬ。上記の句も、一

見句になっているようで、弱い、力が無い

親、子供、子供、親、一句の中に、これでは

困るのである。例えば

運動会我が子ばかりを追うカメラ 庸 佑

立派なものである、句が生きている、どこ

に親の字も用いなくとも、運動会における、

親の姿が躍動している。こうした句を、心が

けたいものである。

月給をさいて持つてく親があり 初 甫

居なくなつてから親の意見が生きてくる

白 汀

義理の親手みやげ一つに気を使い
親なればこそ雨につけ風につけ
野の仏亡き母に似てお在します 湖 平

第一句、このままでは、親が無理に月給を
持つて行くようで難、中七を、さいて手渡す
とすれば、孝道も通じる。第二句、これも亡

くなつてから、でなければおかしい。第三句
句意分明、ただ義理の親の句が他になかつた

ので、着想を認める。第四句、大まかで掴み
どころがない、もっと現実味がほしい。第五

句、名もない野辺の石仏の顔に、亡き母の面
影を思んだ、女性的な句。

誤字アテ字明治の老母に励まされ 保 夫
詫る子と一儲に鼻をつまらせる 千 代

親一人子一人でいて嫁さおくれ みやこ
親どりの知恵が逃げ場を変えて飛び 同

敢然として親つばめ巢を守り 紫
此の道に親子二代の夢をかけ 同

第一句、無学な母のたどたどしい手紙に励
まされる。おそらく故郷の母から都会の子へ

の手紙であろう。明治の母が言い得て妙。第
二句、これも親一人娘一人の生活の一コマで

あるう。詫びる子もこの場合は、相当の年配
の方が芝居にはなる。第三句、よくあること

で、句にするのには損、ありふれた句材は、
迫力が薄い。第四句、これはまた同一人とは

見えない違つた句材で面白い。第五句、これ
も人間から離れて、鳥の親だ、変つた場面で

成功している。第六句、芸道か、発明か、父
子相伝して、目的を續けて行く句意は判るけ

れど、欲を言えば、もっと具体性がほしい。

産声へ父親となる機越し

産院の廊下でやつと父になり

親となる電話へ足が地につかず

右三句とも、親になった瞬間を掴んでよく

まとまっている。ふすま越しに産声を聞く父親、産院の廊下で待ちわびてやつと父親になったことを聞かされる人、産れた電話で、取るものも、取りあえず、宙を飛んで馳けつける若い父親等、具体的な事象を生かして成功している。

子の気付かぬところへやはり気を配り

注射する子供へ痛い顔になり
父親に云うた理屈を子に云われ
健康であつてくれればと母祈る

スケジュール通りに寝ける若いママ

親馬鹿を承知で高い乳母車

右六句共多少句に手を入れた。或いは句主の意に違ふところがあるかも知れないが、句に具体性を持たし句の性格が、はっきりしたことを参考にして下さい。

親になり親の心が今わかり

額縁の中で親父は笑うだけ

背流す如くに洗う親の墓

親の年何時の間にやらこえていた

第一句、子を持って知る親の恩を句にした

第二句、死んだ父親の姿が額縁にある、

しかも笑顔で。下五笑うだけで、安定した生

活も窺えてよい。第三句、墓参に行つて、墓

清 泉

正 朗

破 天

瑞 枝

花 子

弘 生

一 扇

軒 太

松 風

秋 月

鉄 舟

す き

す き

す き

す き

す き

す き

す き

す き

す き

す き

す き

す き

す き

す き

す き

す き

す き

す き

す き

す き

す き

す き

石に水をかけた。ちょうど、今は亡き父の背

中を流すように、孝心の溢れる行き届いた

句。第四句、これも、亡くなった親の句、し

かも親の年より、早や生き延びていたとの述

懐の句、泌々とした余情がある。

底ぬけの馬鹿が顔出す子煩悩

親娘かいな夫婦かいなど他人のこと

捨てそだち親は其の日に追われとり

七光りに囲まれもやしのようになり

子を持つて親の苦労がわかりかけ

第一句、第二句ともに、句材であって、こ

れを消化し、味つけすることが、我々の仕事

だとおもふ。第三句、これが事実であつて

も、あまりに暗い、救われない、もう少し潤

化すること、敢て、嘘を言う必要はなくとも

脚色は作者の腕の見せどころでは無いだろう

か。第四句、親の余光ですくすく伸びた子供

達、苦労も知らずに成長した様子を、もやし

のようにとは、言い得て、面白い。第五句、

これも、言い古されて損な句、もっと突き込

んで具体化したい。

時代のせいか知らんが、親という題で、も

っと温かい人間味を見られると思った。予想

は見事外れた、これも私の明治生れの為かも

知れない。

親として四角に座る癖がつき

十二月二十日締切・二月号発表

題「故郷」 五句以内

小松園

宛 先

大阪市阿倍野区王子町四丁目二番22号

菊沢小松園

浜 ゆ う

西 い わ を

僕の家庭に鉢植の浜ゆうと地下植のとがある。何年か前に郷里の白浜で貰つて来たのを育てたものである。

浜ゆうは暖い国に育つものぐらいいはいうまでもないが、野生植物で海岸の砂地に立派に繁殖し、ふくよかな白い花を觀賞させてくれるので、最近京阪地方の家庭にでもよく見掛けるようになってきた。

この浜ゆうの地下植の方の繁殖力は旺盛なもので葉の色も濃緑色で、巾広く悠々と伸び伸びして満ち足りた格好である。これに反して鉢植の方は狭い場所の中でありながら白い香ばしい花を咲かせ一株も殖えて育っているのではあるが、伸び伸びと發育する余裕はないので葉の色彩にも変化を持ち、型もくねくねとして、ちょうど万年青の葉のように曲りくねりなんともいえない風情を呈している。

いずれが良いか悪いかは別として鉢植の浜ゆうのような味のある雅趣のある作品を川柳に作り得たならどんなに楽しいものであろうかと、私は思った。

大 萬 川 柳

「マ ー ク」

入選発表

選 者 清 水 白 柳
 入 選 六百四十二句
 五十九句

堺 一 扇

酒ぐせが悪く二次会マークされ

島 根 正 朗

包装紙のマークもいちど役に立て

米 子 千 代

マークまたさにピエロの役もする

大 阪 弓 彦

にせものがあゝマークに念を押し

西 宮 千 夏

マークされていると知らず大欠伸

宝 塚 無 聖

二次会へマークされたはいけるも

大 阪 千 梢

マークに惚れて中味はたしかめず

篠 山 与 志

一流のマークをつける手内職

大 阪 寿 美 司

金文字のマークをつけた方が売れ

岡 山 一 声

にせもののマークが少しだけ違い

豊 中 古 方

ちがうといえちがうてゐるマーク

大 阪 竹 荘

マークだけ真似たが味がついて

大 阪 水 客

マークされて以来鳴かず飛ばず

東 京 泰 造

先代の定紋入れてビルが建ち

笠 岡 白 梅 子

乱売の中に誇りをもつマーク

神 戸 どんたく

社のマーク張りめぐらして紙の音

児 島 恵 二 朗

悪趣味がトレードマークで人気

大 阪 琴 女

横文字のマークに弱い団地族

大 阪 十六里

類似品の方のマークが立派なり

岡 山 藤 波

新聞の隅で詫びてるニセマーク

大 阪 保 夫

女ぐせ悪く二重にマークされ

大 阪 あいさ

贈りもの老舗のマークで値踏み

大 阪 痴 亭
 一応はマークしといて出直す気

笠 岡 忠 三

マークしたのは欠席とは拍子抜け

倉 吉 弘 朗

痛いところについてそれからマーク

大 阪 章 雅

一席をぶつてアカだとマークされ

大 阪 阿 茶

娘むこにとマークしてたに引かれ

大 阪 柳 志

横文字のマークに変えて売る野心

泉 北 好 郎

黒ラベル自慢しながら酔いでくれ

早 和 田 さ 子

飛行機のマークが見える日本晴

岡 山 秋 月

世話役が次期の世話役マークする

界 一 舟

おなじものなのにマークで売れ

奈 良 十 悟

下請けのマークは見えぬとへ打ち

大 阪 十九平

マークだけかえて一掃するつもり

岡 山 十九平

献灯にマーク商魂うかがわれ

玉 島 千 翁

直営の食器につけた社のマーク

大 阪 文 秋

帽章がものを言うてるぞと叱り

大 阪 文 秋

売れているマーク買手がはつと

大 阪 文 秋

ライバルをマーク赤字をかえり

大 阪 文 秋

営業所

阿 倍 野 店

堺 店

住 吉 店

平 野 店

都 島 店

蒲 生 店

十 三 店

九 条 店

credit system



越 丸

月賦百貨店

本社

大阪市阿倍野区寺塚山東1の6

電話—623—1151—3

良い買い安い

教育マママークをされる子に育て
 一応はマークをされる過去を持ち

西 宮 多久志

マークだけ変えて新製品に化け

大 阪 梅 里

マークされてることも知り使い込み

大 阪 梅 里

板開いしても大きく社のマーク

石 川 芳 朗

特撰のマークをつけたはんば市

大 阪 季 賛

お互いにマークしている目がき

大 阪 季 賛

一流になってマークは見直され

大 阪 季 賛

このマークですよと妻に念押し

大 阪 季 賛

商人はマークで値引く巾を持ち

大 阪 季 賛

自衛隊刺のご紋のない兵器
 大坂 金三
 酒壘のマークがみんな前を向き
 高俣 静馬
 おれよりも社章を信用されたい
 大坂 文秋
 マークされた男で金はまかせられ
 笠岡 忠三
 マークした子を最前列の席におき
 岸田 幸三
 そんな筈ないとマークに頼りきり

八七六五四三二一 大萬川柳 教會の選者吟
阿美き好吸柳梅水 紋も

マークとしか見えず
ベストテン(十月現在)

三五、五	大阪
三三、五	大阪
二八、〇	大阪
二四、五	南河内
二三、〇	泉北
二二、〇	岸和田
二一、五	大阪
二一、五	大阪

客里江志郎子房茶

一一一一一
八七六五四三二一〇九
宗春没木可惠清痴文靜
太食子魚住朗人亭秋馬
郎巢子魚住朗人亭秋馬

二一〇	高橋	一九
二〇五	大阪	一九九平
一九〇	大阪	次ぎの兼題「職人」五句以内
一八五	布施島	締切十一月二十五日
一七八	兄島	発表十二月二十一日
一七五	鎌山	十二月の兼題「早・熟」五句以内
一七七	和歌山	締切十二月二十五日
一六五	大阪	発表一月二十日
一六〇	大阪	投句先 大阪市阿倍野区松崎町三ノ十
一六〇	石川	大萬川柳会

十月四日午後六時から第九回常任理事会が本社で開かれた。まず机上に飾られた路郎賞の楯に諸氏は目をそそぎ、内藤きさ子さんの健闘をたたえる声がこころしくでさやかれた。

同人規約一部変更

1 P 11行目の「月額金二百五十円」を『所定の会費』と変更。1 P 13・14行目の添削「の」を削除して「を求める」の四字を入れる。

2 P 4行目の「会員不要」を、「会員は不要」にする。

4 P 3行目「六月」を「八月」に。「五月」を「七月」に変更。

4 P 6行目「本規約の改廃」の下へ「及び会費の決定について」の十一字を入れる。これを同人総会で承認することに決定。

参事として服部十九平氏（岡山市）と八木摩太郎氏（堺市）常任理事として金井文秋氏（大阪府）を迎える案がで、出席全員賛成。水客氏名の類焼を有志で心ばかりのお見舞いをするようになった。近く棟上げをされることを辻白溪子氏からご連絡があった。

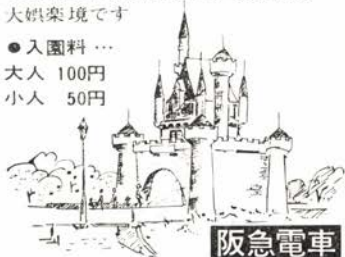
生々庵主幹の句をトビラで発表することを葉氏の発言で可決した。同人総会と句会のダブルヘッダーで諸氏の顔にも緊張の色が見えつつも、のように笑声もあまり起らなかった。

出席 白柳、静馬、多久志、梅里、生々庵、恒明、形水、薰風、栗、好郎、小松園、文秋、一三夫諸氏。

ファミリーランド

歌劇と温泉と各種の遊戯機がそろった宝塚ファミリーランドは、おとなも子どももみんなが楽しめる大娯楽境です

●入園料…
大人 100円
小人 50円



阪急電車

時 十一月二十日(日)	午後六時	所 アベノ区松崎町三ノ一〇
題 きらめ、モルド、答え	運勢	玉造交差点南一〇米
時 十一月十日(木)	午後六時	所 大言印金庫

☆ 柳 界 展 望 ☆



同人総会で経過報告をする中島生々庵主幹。
(舟遊氏撮影)

(橘 高 薫 風 担 当)

▼麻生霞乃先生(奈良県)は長男アト氏の令室が病氣療養中のこととて、家事を手伝いすこぶる元気に消光しておられる。女流作家の路郎賞獲得をお喜びになつていた。

夢選「甘い」内藤きさ子選「魚」金泉万楽選「逆」伊東静夢選「明るい」高橋操子選、投句は五十円切手封入の上、前日までに必着のこと。岸和田市宮本町二六三岸和田川柳会宛。

▼第十七回西宮市文化祭協賛川柳大会は、十一月六日正午から教育文化会館二階で開催。兼題「つくる」俊作選「色彩」東洋樹選「堤防」すゑ選「鐘」主税選「市政」郁三選、投句は各

題別紙に三句ずつ明記の上、百円同封して前日まで西宮市前浜町三ノ二七福島三宛。

▼川上三太郎著「川柳二百年」発刊記念に著者の肉筆短冊が頒布される。先着二百口を限り著書と短冊とをあわせ千五百円(送料共)申込みは東京都中野区東中野一丁目三九の五川上三太郎宛。

▼第三十四回京浜川柳大会並びに第一回川柳文化賞贈呈式は十一月三日午前十一時から東京都、渋谷信用金庫本店ホールで開催。

▼大和タイムス創刊二十周年記念川柳大会は十月九日午前十時から奈良公園内興福寺本坊で開催、清水白柳氏が選者で出席した。

▼浜田久米雄氏(岡山県)は町議の選挙応援で忙しく川柳大会にも欠席がちであった。

▼布部幸男氏(京都市)は川柳、冠句(八世櫻家)のほかはに寄席芸能、特に落語研究家として知られているが、このほど「百篇百話」

を青泉社から出版された。「扇子」とにぎり日本の雲が生き「寸刀」

▼服部十九平氏(岡山市)は九月十七日五百人の遺族旅行団を引率、善光寺に参詣、志賀高原、草津、日光東京、箱根等を巡遊、二十一日に帰岡された。又、九月二十四日には修養団の四国遍路研修会に参加室戸山の上の東寺に宿泊、奴田原紅雨氏と予め連絡していたが、台風二十六号に禍されて山上のお寺に缶詰になり電話でやっと交歓が出来たという有様であった。

▼河村日満氏(鳥取市)は十一月から始まる市議選のため多忙をきわめ、本社の同人総会に出席出来ないことを残念がっておられる。ご健闘をお祈りする。

▼宇和川木耳氏(布施市)は九月九日マイクロボスで洛北貴船へ。「やっこさ貴船の水でよみがえり」

▼清水谷句楽坊氏(京都府)は永年西村姓を使ってこられたが、この度、生家へご復帰されることになった。

▼藤原秋月氏(岡山県)は九月四日竹原の近県川柳大会へ横山一声氏と出席、ここで白柳氏と、また十一月

疲れ
肩こり
食欲不振
つかれ目
神経痛に

▲タケタ薬品

アリナミンA

・新 同 人 紹 介 ・

古	木	井	水
川	山	上	粉
蓄	要	旭	千
水	次	峯	翁
白溪子・たつみ推薦	十九平・遠二推薦	十九平・生々庵推薦	十九平・生々庵推薦

の西日本川柳大会では生々庵主幹とそれぞれ初めて会った。池田古心氏とも一年ぶりで話し合えて嬉しかったと。

▼川岡霊眼子（諫早市）は九月十一日一時から長崎市で行われた県庁主催の第六回県民文芸大会に出席、川柳部門の「父」で賞を得られた。「下積み」の父に無口の底から」

▼高崎雄声氏（堺市）三女順子さんは加納信六郎氏ご夫妻の媒酌により河村省三氏と婚約、九月二十七日華燭の典を挙げられた。お慶び申し上げます。

▼豊中市民川柳大会（第九回）は十月二十三日正午から豊中市立中央公民館ホールで開催。堀口塊人氏は「西鶴いろいろ」を講演。本社からは戸田古方氏と松江梅里氏が選者として出席。

▼和氣川柳大会（第二回）が十月九日和氣町役場和室で開催、賞品としての川柳塔柳箋が好評だったとのこと。



▼西いわを氏（大阪府）が府立羽曳野病院5下へ入院されたとのこと、本誌八月号の送本を手伝ってくださったほどのお元氣だったのだとうしたのか。ご全快を祈りあげます。

▼小林トメ子さん（大阪市）のご夫君がケガをされてご入院中とのこと、お見舞い申し上げます。

▼正本水客氏（大阪市）から、心のこもる激励やお見舞いをいただき柳縁の有難さを感じます。なお十月六日に棟上げ、月末に完成の予定とのこと。

▼堺市文化祭協賛第20回市民川柳の会が11月6日午後一時から堺市教育会館（高野線堺東駅下車東へ二丁。八方道神社半丁西）兼題「遊ぶ」住夢選「青年」梶川雄次郎選「キャッチフレーズ」榎本聡夢選「環境」川村好郎選。主催、堺市九間町東二丁、八木摩太郎方堺川柳作家協会。後援堺市教委ほか、市長賞。

▼山陰川柳作家大会を11月

3日午前10時から鳥取県東伯郡東伯町横山旅館で開催。兼題「稔り」「産業」「助太刀」「美しい」席題多数各題三句、賞多数、会費百円。投句は10月31日まで、清水一保宛。

▼東野大八氏（岐阜県）は10月13日阪神方面出張の寸暇をさいて、宇和川木耳氏と不二田一三氏に会い、いつものように、ニギヤカなこと。スサマジキこと。

▼伊丹市文化祭川柳大会が11月13日正午から公民館階上で開催。菊沢小松園氏は兼題「砂」の選者で出席。

▼噴煙吟社（熊本市）は10月9日午前10時から熊本県福祉会館で噴煙二〇〇号祝賀川柳大会を開催。なお、特集「ひのやま集」に大嶋清明主幹以下自筆の句と文を一人一ページという豪華24ページが目をつひく。

▼尼崎市質屋協同組合の機関誌「広い路」に川柳広路欄が設けられ、第三回新年号の川柳が募集されている。兼題「摺印」「深刻」締切・11月末日・尻崎市西大島南口四三八・森田栄一宛。

松坂屋友の会 ■ 6階クラブ係

カトレヤクラブ

会員募集

お買物資金の積立に
おたのしみプラス
講習会・観劇・レクレーション・
展覧会などにご招待

会費 1ヵ月1,000円

お買物票 満期時に会費相当額をお返しします

大阪天満橋
松坂屋
(42-22)

川柳塔創立一周年記念句会

41年度・同人総会

とき 十月九日
会場 自安寺



内藤きさきさんが獲得した
路郎賞の種。正面に句がき
さんである。

記念句会にさきだつて四十一年度の同人総
会が三時三〇分から開かれた。

好郎氏の司会で、まず生々庵主幹の挨拶が
あった。一年間の成果は同人諸氏の熱のたま
ものであると感謝され、指名によって議長席
につく。そしてふたたび登壇して経過報告で
ある。社の運営、雑誌の編集、路郎忌、路郎
賞などの年中行事にいたるまでこまかく報告
された。

梅里副理事長から、同人規約改正をのべら
れ、(五一P参照)。つづいて副理事長多久
志氏が会計報告を紙に大書した数字をもって
示めされた。

生々庵主幹から左の役員が推薦された。参
事に服部十九平氏(岡山市)同じく参事に八
木摩太郎氏(堺市)常任理事には金井文秋氏

(大阪市)

ふたたび多久志氏が登壇して質疑応答には
いるのだが、その前に社の運営法を語られ、
同人増加案、購読者倍加運動から、雑誌発展
のための同人費値上げなど、これは諸物価の
値上げによるものである。

同人費の値上げはごく僅少だったが、賛否
両論だった。誌代も値上げせず、もう一とふ
んばりせよという声もあった。またはこの際
当然値上げすべしという声も出た。

「近作柳樽」の選者を一年交代にしてはと
いう発言があった。

とにかく創立一年である。まだまだ不備の
点もあるが、やはり時をかけて、おたがい
助け合つて進んでいきたい。各人が「自分の
雑誌である」ことに誇りをもって進めば、か

ならずいい結果を生むにちがいない。

同人諸氏の社をおもひ真情はうつしく、
あすの「川柳塔」に希望の虹がかけられここ
に五時閉会。

同人総会出席者―川村好郎・金井文秋・菊
沢小松園・西田柳宏子・大坂形水・阿万の
・正本水客・辻白溪子・松下たつみ・橋高薫
・風・若柳潮花・直原七面山・福島鉄児・田中
・狂二・河相すゝむ・北川春果・内藤きさ子・
・植山武助・高橋伊子・葛城伊三郎・山田季賛
・本多柳志・山内静水・宮川珠笑・水谷竹莊
・傍島静馬・不二田一三夫・児島与呂志・中
・島生々庵・樋口舟遊・松江梅里・若本多久志
・光好陽子・後藤梅志・市場没食子・浅川八
・郎・本多清人・服部十九平・長谷川三司・神
・谷凡九郎・中島小石・菊田いさむ・黒川紫香
・清水白柳

★ 六時から同会場で「一周年記念句会」が待
っている。

総会がすみ同人諸氏はそれぞれ夕食をとり
に千日前へ出られたが、気の合った同士が一
杯という組もあったらしく、このあたりから
なごやかな句会風景になる。

遠来岡山の服部十九平氏、直原七面山氏、
光好陽子さん、広島山の山内静水氏など路郎忌
いらいの対面である。

「せんば」の御大、岡橋宣介氏が岩本具里
院氏がかご一統を連れての「友情出席」とい
う菊花壇のような花やかさを添えてくださつ
た。

早朝からの列握手（と）も歌手が来た
真先にライバル握手求めに来
苦勞を添えたなあと親友手を握り
左手を添えて握手の長い事
来賓へ機械のように手を握り
ハネムーン窓の握手へベルが鳴り
握手にも馴れてタレントめいた靴
フラッシュに握手したまま待（ち）つ
選挙前両手で握手してくれた
外人へ女形としての握手ぶり
握手又カメラを意識したポーズ
握手させといて同会はちと妬き
ぐるりみな裏の握手に気が付かず
握手した手が僕の背ナを指す
天皇と握手した手套家宝とす

操子 柳宏子 千葉 葛城 狂宵二 花客 白水 薰風 小松園 柳志 白溪子 小松園 具里院 十九平 昌介選 失名 古三司方 古三司方 たつみ 良夫 千葉 静水 葛城 阿茶志 梅骨 一た 葛城 万の 静歩

虫の身になって虫籠釣りなおし
遮断機のベルに虫の音途絶えがち

兼題「週末」

正本水客選

出張の週末妻を呼び寄せる
週末を吾が家と思ふ膳につき
週末の人出へ候補の第一声
週末の予定どちらも断れず
週末のプランをくずす電話鳴る
週末もない商人へ娘は不満
陳情が済んで週末まで遊び
週末のうそは社では家では
週末の混雑快い若さ
週末で腸をこわした檻の猿
週末へへそくりが出るタイミン
鯉にふをやって週末古都に
浜木綿へ週末の潮ぐつと冷え
週末は箱根大臣多忙なり
週末へこれから稼ぐ灯の赤さ
週末のドライ子の方を向く間
週末のプラン逆うように降り
週末のレジヤーこそ智慧に
連休を控え週末活気づき
痛つきで来て週末を泊り込み
週末をずらせて出掛ける老夫婦

旅風
梅志

礎山

鎮也

正朗

清泉

千梢

白溪

吸江

春果

きさ子

加仙

舟遊

野迷路

すゝむ

一骨

具里院

梅里

古方

柳宏子

武助

梅里

武助

新川柳鑑賞

定価 二五〇円
送料 一二〇円

橘高薫風著

れもん

送料共

五〇〇円

兼題「栄光」

西尾

人間国宝などと栄光窮屈な
表彰を栄光とせぬ変り者
白足袋の白さ栄光の文化賞
栄光の民芸清貧まだつづく
スローモーションも栄光の人ら
苗作り晴れて叙勲の庭に立つ
栄光の座守るカンパ強られる
栄光へ孤独がせまる茜雲
金で買える栄光だから道化じみ
フラッシュ吐切き栄光の人眼つ
栄光をひとりになってかみしめる
栄光のメダルに犬は尾を振らず
栄光のその後骨董屋だけが知り
栄光へプロがそのまほっとかず
赤貧に日本一の児が育ち
栄光の胴上げに散る花ふぶき

昭三
多志
吸江
生々庵
好郎
弥生
昭三
静水
武助
たつみ
天樹
みさ子
あきら
水客

琴選

芳子
湖平
春己
古樹
静方
静歩
蝸牛
すゝむ
生々庵
万の
好郎
静馬
美己代
白溪子
加仙
多久志

黄銅六角ボルトナット
及び特殊換物全般

西出螺子製作所

合資会社

大阪市天王寺区空堀町八番地

TEL 三四五一 四

夜間 四四〇八

家族ぐるみで栄光の座をつかみ
栄光の日よ座ぶ声が部屋に満ち
栄光も涙敗れても涙
栄光へ演技離れて出る涙
栄光を明日にライバル握手する
人間国宝今日天皇にいたわれ
栄光の座とは本人知らなんだ
栄光へつなぐハードトレーニング
栄光の第一声は羽田にて
優勝の栄光遺影も写される
栄光は胃ガンの床へお菓子折
栄光へ一歩手前で呼吸ぎれし
栄光のもう週刊誌裏話
栄光の涙はふたりだけのもの
栄光の裏には裏のある話
明日があるから栄光が恐ろしい
栄光のその日機上の人となり

柳宏子
一三夫
好郎
美恵子
十九平
珠笑
すゝむ
白柳
いさむ
梅志
没食子
没食子
与呂志
春果
凡九郎
紫香

▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

南大阪川柳会

金井文秋報

精一杯我慢している肩の線
手カガミに顔のくもりを教えられ
登り坂にあるタレントの風当り
おかしはめても一杯をはのめ
正直に美德を守り追いつかれ
その裏は違挙のにおいする美德
一期一会くもればくもる楽しまん
ボンコツの自動車もある玩具箱
正直に吐いて井平らげる
飲みに行く時は坂道苦にならず
サロンプラスはってボンコツを使い
くもりのち雨を覚悟で二人会い
ボンコツの時計意とせぬ父の腕
錦着て帰る故郷の坂へ立ち
正直に言うて顔と母は知る
一杯のお茶に家風を見せられ
ロボツはスイッチ通り動くなり
ほうべんに云うた嘘にも顔赤め
ダンパー一ぱい積んだ音になり
正直にしゃべれば弁護士あきだし
正直に言えぬ病名医者外らし
坂道へかかりボンコツあごを出し

静痴吸白お千柳弓金章小清一滋一古花文静梅芙柳
歩亭江柳き梢志彦三雅園人舟雀栄方梢秋馬里代子

くもに空忘れシャッター切る名所
反射鏡大きくせまるいろは坂
そよ風が一ぱい機嫌の頬をなで
ポンコツに見られたくは髪を剃り
正直に話せば妻は笑うだけ
若いうちくもり後暗で夜は更ける
奥の院坂の高さへ遥拝し
老の坂越えて楽しい趣味に生き

玉造川柳会（大阪市） 西出一栄報

孫千雙集季八喜近
生子樂一贊郎仙爾
路

ポンポンが痛々やせんといふ目をみれば、
スチユワデスバンド促がす風ともし、
よほどこの事他人様の知恵を借りり
事故現場破片そのまゝ繩を張り
飛び散つた破片が事故を物語り
絶望と決める破片の文字悲し
く強く生きてくじらヨイトマケシ
云い訳の多い禁酒のくじけがち
くじけてはならぬ一杯のんで行き
キモ食たの割にスタミナがつて来ず
スタミナに異状ないといふのが出来ず
スタミナをレジヤに結ぶニマシヤル
スタミナがあつて趣味にも生る道
スタミナはつけたし家計簿は赤字
沈黙のまは床踏みならす 反対派
小さい梅抱て黙つて夜のしつ
反対の沈黙だとは気がつかず
沈黙へ一人笑えは皆笑ひ
豊作へ祭太鼓のようひびき
干穂の下で野菊が背伸びして
寒り過ぎ柿は自然に逆らわす

竹原川柳会十周年記念大会

無茶苦茶の中のユルモア憎まれず
そんな無茶いいわで結ぶ電話口
無茶を言うときの言葉に余裕なし

美風 正一 滋養 照栄 八郎 中仙 風洞 文秋 白方 宏雅 章步 静美 金三 六竜 古方 柳宏 貞山 雀踊 静馬 井平

良くなつた国道だけは良くなった
国道の夜更けうどの灯が見える
パトカーが通り 国道行儀よし
自炊してバイトして卒業まだ遠く
だしためけに困るととり貸しもしせず
まじのニュースドラマの興をそぎ
だしめけに來て金を貸せ国訃り
切り下げた峠へ地藏忘れられ
水飢饉車でもめる杭の家出
紀元節峠の茶屋に日章旗
二役の汗が夜学に來て匂い
字を一字違えて偽のよくか二役目
偽物ですんでよかつた落し物
薄給の棒で青春謳歌する
青春をかけたトロフィー持つて嫁き
青春の傷は故郷の山で癒え
青春を贖まで出して 謳歌する
限界を越えた好意に三者の目
愛だろか好意だけではもの足らず
むき出しの好意に女むきを変え
母といふ機械のように朝を起き
創立十年今朝の気持を忘れまじ
動くものみんな動いて朝の駅

ウイロー社会句(ハワイ) 築

恋女房笑顔忘れた倦怠期
情熱が脇辺を行く倦怠期
倦怠期妥協せぬ顔つけ合せ
倦怠期ダブルベッドに壁が出来
独酌で倦怠期など吹き飛ばし
無言の抵抗続く倦怠期
倦怠期夫唱婦隨は何処へやら

紅魔曉拜柳峯內 秋靜清政秀失白豐遊花萬政俗菁十柳潮愛文賴千惠孤一宏紅尚
花麗舟山葉田海 無草水紫二郎名柳 心洞壽己薩居平寅音鵠庫人波朗堂聲 兒道

倦怠期らしい夫婦の声尖り
倦怠期髪の匂いも鼻につき
倦怠期もう仲間も来てくれず
ゲテ物を食べて食道菜と云い
道菜もタレントなれば金になり
道菜も一人一人にある理屈
道菜で始めた事が金になり
祖母だけが道菜昔の味方なり
意見する親も昔は踏んだ道
道菜も金の切れ目で縁が切れ
ガラクタの中に楽しむコレクシヨ

打吹川柳会 (倉吉市)

奥谷弘朗報

銭太鼓素朴が生んだ文化財
満ち足りた夫婦へ悪友寄って来ず
土掘って居る間に世間に出し抜
勇退の勇が淋しい字に見える
失敗を責めず恩師の人間味
しあわせの中に子供という宝
我が老をあばいて鏡の冷たすぎ
山半分削ってこも住む心地
男見る目だけが肥えて嫁き遅れ
働いた手がおしほりに気兼ねする
母と子の意見に父が寄り切られ
今朝咲いた鉢を病床まで運び
安うけあいして人間を値踏みされ
発言を買われ好まぬ役が付き
野球拳負けて脱きたい気にもなり
妻の頬をためて見たく嘘をつき
家庭にはなじまぬ女の白い指
へだてたる歳月埋める文字のなき
ゆずられた席へ感謝をして座り
作文のモデルにパパの朝寝坊
マスコミをさける名士になる願
高原はよし道場の住心地
喰べたとは言っても腹が承知せず

浮葉子 快夢起 雪女 カロ女 蒼蛇楼 三石 萬里坊 紅茶 泉太 浅太 大鳥 明郎 好江 夕路 祥子 素枝 瑞枝 石花菜 晃男 千代 住坊 小茶坊 竹雪 紫雪 澄水 湖蝶 山一 乱坊

汗と意地遂に手にした優勝旗
強情と思うが筋が通つとり
五黄の寅を売物にして強気なり
口もとに親父ゆずりの意地があり

大鉄川柳会 (大阪府)

辻白漢子報

灯籠のよき庭を賞め池を賞め
灯籠の古さへ虫が鳴きはじめ
鐘樓の僧朝焼けへし立ち
鐘樓の鐘は召されて征ったき
鐘樓の小坊主無垢のままで立ち
背負うだけ背負ふ故郷の母が着き
背負うて来た罪の深さ云う女
国背負う口が軽々しい事を云い
重い重いと母負うてみて嬉し
悲しみを悲しみとせずおはん
観光課を色気を出している遺徳
御先祖の遺徳の重さにすねて生き
生前を偲ぶ追加の酒が要り
遺徳には遠く母校へ寄附をする
天皇の遺徳をテレビドラマにし

交通局句会 (大阪府)

児島与呂志報

巡歩 光枝 弘朗 季賛 耕立 精三 一求 雷太 水客 杜的 一高 永断 白漢子 志報 緑果 春雨 漫多郎 清流 恒明 正則 北森 正則 雅万 鉄舟

へボ将棋横から天狗口を出し
観光バス阿波へ阿呆になり来る
片づけは後に廻しておはなはん
電話口僕の頑固に負けてくれ
新築へ石の祝を持ちこまれ
先生は参観来ている子に読ませ
余生ならカラーテレビもはずん
広くなりお葉書簡単年とはど
牡丹灯籠の漆を夜が眠つたか
夫婦だけ知しノミ屋の券を買
飲み代を残しノミ屋の券を買
やあ暑いですなど安完りする暑

高知川柳社句会 (高知市)

川竹松風報

楽になる為の汗なら流します
アルバイト汗の尊さ知りはじめ
夏祭り浴衣でみこしかつぐ汗
解放感と呼びよせている海の青
土佐フームはるばる海へ死に
宿がりの平和と大洋の波知らず
海の香の匂う大きな手に抱かれ
出稼さくとうか祭りの保安帽
さいふ今日妻にまかせた酔心地
仲良しに招待された夏祭り
不信心もつて誘われた祭りの灯
小百姓も天地の恵み疑わず
さりげなく涙はほほをつたう
三才の抵抗庭にはね転び
流れゆく雲に帰心を誘われる
口あけた雲をインテリカッ
故郷も飛躍村から町になり
二代目も口べただったデコ作
恋知って娘素顔はもう見せず

和気川柳会

藤原秋月報

天乃平 一乃字 雅果 三季 淡舟 醉龍 六龍 春果 与志 伸子 勝子 伊津 古城 美知 古城 夢風 松子 文子 舞破 天樹 句念 紅雨 竹雨 斐山 鰻蛇

冷蔵庫をまた開けてみる暑さ
土用丑高い鰻の値に迷い
装つても暑さのひどいこと
暑くとも働らくことにある誇り
風鈴が動かずじりりじりり汗
暑中見舞確かに母の文字で来る
仙境が避暑地になつて俗化する
むし暑さふりきるようになつて
お暑う御座居ます氷屋のお世辞
蘭草刈る汗は電柱の陰で拭き
玉の汗忘れて生きる芸の汗え
冷房を出れば暑さがむつと押し
道中の暑さを我慢する帰郷
汗ばんだ服を見交わす共稼ぎ
どん底の暮しへ暑さがよくこたえ
玉の汗そつと流した桶の出来
耳よりな薬姑はメモを取り

備前川柳社

横山一

三角な顔に無心を言いそびれ
三角布の色あせている無事故
三角の恋とは連の悪い人
三角のたんばを作りレル仲び
三角の最後の積木で家ができ
稲荷すし四角の膳に取りまかれ
三角な顔遅しくあこが張り
三角関係両手に花の内はよし
三角の西瓜のはしは母が食べ
三角な顔が笑つて仲直り
逃げられた顔三角につり上り
三角な敷地に四角な家が建ち
三角に眼を吊り上げる待ちぼうけ
新聞を斜めに読んで忙しい

南海川柳会

(大阪市) 辻

秋月 胡風 文平 正三郎 久米雄 紀のぼる 三平 左馬 緋呂詩 白馬 峰泉 曙花 正美 伊久野 藤花 不朽 正洲 一坊 怡生 柳仙 幸月 秋風 伊野 浄美 久米雄 芳月 正美 三六 圭水 金三

レシシグカー大の男をあきさせず
レシシグカー大人も負けずく遊び
居間一杯レシシグカーの店開き
レシシグカー どうぞうのパーパ夢中
レシシグカー マイカー 族の気
レシシグカー 勝負は電池切れて
あすなる川柳会 (大阪市)

出まかせがもう寛容の線まで来
誉められて出まかせせだつたも云々
出まかせをマイク黙々伝えたも云々
眼帯の理由を聞かれた聞かれ
お互いに五〇点ずりの夫婦です
月冴えてわが手作りの味もよし
露天風呂月を二つに割つて入り
燃ゆるなき月のころを君知るや
イニシアルはでどつちかと伝言板
イニシアルが一つに絞られて日記
待つ人のイニシアル書いて消し書いて消し

どんぐり川柳会

(大阪市) 川村好郎報

順番が来る頃痛さ治つとり
雨だれのふくれる順を見る孤独
夏休み貯金の価値を知らされる
夏休み泳げぬ親に付き添われ
方言も覚えて帰る夏休み
お悔みのつづきを妻に助けられ
順番はない母だけの終い風呂
食べる順間違ひ喉にひつかかり
鍵つ子の夢は番待つ夏休み
石塔を切つて順番待つつもり
いやな役順番までの早いこと
順番に母を労わる長女次女
夏休み田舎暮らしが飽いてくる
口下手であるが話は聞き上手
口下手の言う筋書がのみ込めず

圭水 和念坊 昭宏 貴山 双彦 百酒 弓彦 慶助 和子 福子 ゆき子 素郎 恵美子 梅里 雄峯 孝人 一生 吸生 集生 弥生 凡雄 功雄 痴坊 喜風 双葉 柳

夏休み教室に鍵つ子花をかけた
口下手の誠意で丸く納めて来
夏休みも一組の孫も来た
まるべに川柳会 (大阪市) 川村好郎報

ハツ当り女房もかしこう寝てしま
八掛をやや派手にして四十過ぎ
当らんも八掛されど気にかかり
八方美人本心どこにあるのや
負けん気が泣かす来いと子を叱り
すれ違ひ夫婦で稼ぎ家を建て
八月の汗一ぱいの甲子園
八月も連れて苦吟の鐘一つ
八月の暑さに負けたか楮立ち

どんぐり川柳会

(羽曳野市) 川村好郎報

交差点生きるきびしさ教えられ
立体交差点昔ながらの陽が沈み
交差点親の違反を子がとがめ
偽りの心が重い汗を拭き
スターまでの汗は知られず羨まれ
今日も又汗を流せど宿と耐
人生の縮図ラッシュの交差点
信号待ちはじめて口をきいた彼
交差点デパートに急ぐ気も知らず
付け馬をうまく逃れた交差点
交差点までのつづりがまだ話し
残業の汗電球に輝きぬ
ひや汗の出そう言葉にふれて
あつあつは見ている方が汗ぬぐ
見合ひするつぎ添いき汗をかき
マニキアを汗して今日も彼を待つ
ひや汗を出して話は後や先
一か八か汗をかききプロボス
門限時十歩手前で汗を拭き
貧乏も汗と一緒に流したい

好梅 好里 雄幸 瓢太 泉里 扇里 茂斗 星斗 好郎 史好 比呂路 白秋 芳秋 若舟 美蓉 天一坊 鬼水 重美 寿美 与太郎 八十代 久水 一八 敏夫

産院の廊下の夫も玉の汗
汗かい出して働く汗の美しさ
大仏も汗かき給うやこの暑さ
好きならば汗のふき出た顔までも
乞食でも大臣になる星をもち
星空に恋人同志夢をかけ
無事だった夜風が通る交差点
むらくも川柳会(島根県) 藤井明朗報

先客の声に集金気をきかし
先客へもはやたばこも吸いつくし
残つての香りへ先客しのばれる
夏物一掃残暑の町は特備市
先客を数え歯痛の子をなだめ
先客があつてこそ引きかえし
顔馴染今年も金魚買わされる
涼しさを売る金魚売り汗をかき
大橋も仕掛火花に酔うている
虫が鳴くあせ道夕陽の中の僕
先客があつて皮肉を言いそびれ
かきみ川柳社(岡山県) 池田古心報

狂か 茶坊 幽玄 めぐみ 直竜 好郎 明朗 清朗 白汀 正郎 加代 清一 鶏夢 昌生 孝華 老骨 碧心 古文 雅子 晴月 秋平 稲平 竹青 溪仙 清水

不調法ながらと浪曲名調子
富柳会(富田林市) 阿部柳太報
しぼるだけしぼりあつさり袖にま
つり草へ袖があるうがなろうが
袖にたの彼女を連れて来る
袖かんで舞台は初心な恋らしい
つつ袖にモンペの後家で市長賞
御興引く氏子の袖は背で結び
役目柄 昼夜二つの顔を持ち
役目をば云えば皮肉な目に出合
役目です法に二つはありませぬ
女秘書妻のかわりもつとめさせ
片すみへ呼んで役目の念を押し
立つだけの役目へ借もモーニング

岸和田川柳会 上林加仙報
ひらかせてもらい朝顔を嫌
平等に揺れ吊皮にストはなし
幸運になれる手相を信じとく
見送りの汗に九拜の冷房車
サンダル外せは夏がつき刺さる
夕焼に溶け入る寡婦の物思い
昼寝する顔へドラマは泣いている
センスある会話をひかれ早三年
靴を磨き君に白紙の請求書
無重力と開う宇宙外は闇
タイアップした中途で気が合わず
孤独感川面のネオンに青く映え
欲捨てからの希望にはげまされ
七面短詩型文学クラブ(和歌山)

蛙浪 半月 東雲 吸江 六童子 吉太郎 紅月 柳太 摩天郎 八郎 花梢 白柳 美代 白柳 三志郎 繁人 飄風 白光子 一風 暉風 美咲 好子 多佳子 起人 忠士 加仙 康郎 保石 利晴

「川柳雑誌」のバックナンバー
「川柳雑誌」のバックナンバーがすこ
しあります。それから「古稀特集」や
「四百号記念」も残部少々。ご所望の
方は川柳塔本社へお問い合わせくださ
い。(終刊号は売り切れしました)

ついそこへ来てる太鼓へ箸を捨て
家毎に酔の匂いする遠太鼓
日本の音で太鼓はなりひびき
自ラ渡す眼はその人を見ておらず
自転車踏台にしてピラを貼る
ピラばか貼つても当選出来ぬ
ピラの裏白きをメモの帖にとじ
釣ブーム垢のたまつた舟も貸し
踏切は手垢で光る旗を振り
垢つけて立読み何も買わず去に
垢沢山テレビ見ながら耳掃除
憂きものの一合宿垢ばかり
垢まみれ登山帰りのたくまし
不景気もピラで飛びちるおもしろ
選挙エロ寄港反対のピラが来る
オーエスケー川柳会(大阪府) 形水報
高い値になんだかんだとケチを
しびれが本売れば株価は動き出し
母と子が本を手にする新学期
本箱にあふれる程の週刊誌
本立てのシリーズものは飾るだけ
本を読む子の目がそもホームラン
小包へむすつと忍ばすアリナミン
高くつく厚意をうまくとわれず
買気あるのて高い高いと口くせに
踏台を使った子供の子供の智恵に負け
清和 勉彦 泰子 義智 善治 光三 幸子 俊夫 三幸 酒助 広田 美露 高田 真一郎 垂一 健一 扇坊

立読みの出来る本屋で待たされる健康を養老院でもてあまし高いので買わなかったと飲んで本行き来しても恋の芽が育ち初ものにして松茸高過ぎる竿ついでそれで届かぬ柿の枝待ち合せ難波で高いものにつき

駒つなぎ川柳会

(大阪府)

南柳報

抜き打を明日のデートを反古に抜き打ちに急行止まる駅が出来抜き打ちにしどろもどろ受け言葉見習が一人前の顔に来る見習の便り苦勞にはふれず見習と見習い背中流し合ひ根生のある見習いに骨がおれ釘打たすだけ打たし台風外れて台風一過無駄でなかった釘を抜く台風が外れ阿呆らしい釘を抜き「おはなはん」の次に台風聞く茶の間台風も折る農家をさけて行き台風のたびに案ずる子の住い屋根上に親子抱き合い流れ行く

明朗川柳会

(大阪府)

田中多幸報

せじ聞いて商売上手に買いますしボロ儲け聞けば勤めがいやになり商売が生物だけに気を使いへんこつの店が案外よくはやりブラウスにキャバレー代も含んだかけ引は商売人の智恵くらべ商売は運根鈍で基礎造り

神田 常夢 木夢 形石 入仙 柳

富士 多幸 源幸 久幸 濁水 芳生 弘

商売が好き息子で立直り町内会寄せ屋上座に古参顔儲かれど手形ばかりが手に残り重い腰商売商売とあけて行き商売と思えば無理も腹立たず万国博 国費で誰が儲ける気商売は一十一は五にもなる

ふじかけ短詩睦会

(鳥取県)

礎山報

たんじよう日当てが外れたお祝日サラーリマンへまたふえるおくりかな舌をかみそう祖父の本宇宙ロケット一号程は騒がれずランドセル僕も出来そう顔が来る幼稚園の門せまくする団地増えデパートで遊んだおたんじよう日入学そうそう進学へむちを打ち父の文字旧かなだら舌をかみ月の裏見て来たような議論するおこひけるねえちゃんの手がほしい月と虫だけが寝ないでいる夜が見ちゃ悪い言えさせか見に行った宿題へ母の学力たのもしいい父ちゃんになにあげようたんじよう日

以上、小・中学生

もう秋が来てるよ姉えスラックス父の日を父は知らずに飲んで来る父の日があつたか父不思議がり激突があるのは日本の車だけ一度ぐらい負ける大鵬見たいもののお気軽においで下さいもうけます

繁子 金泉子 清江 一登 意明 久子

英子 聡男 明男 昭好 一代

切り捨てはご免と車消えている青い目のモウカリマツカに汗を母の日を祝って父の日を忘れ此の机見も使ったイニシアル父の日があると知る頃母ひとり代筆をさせ代読もさせられるファッション見ぬも気の毒見毒赤旗を振る手も握る手も同じ優勝の相撲勝つのが勝つただけ帰省して母の料理のうまさ知り校庭へ若さはじていてる競技折紙の飛行機子等の夢も飛び人類のあゆみを語る出土品

★

「雅号ぶっちゃけばなし」は今月休載いたします。(編集部)

宴会・折詰・出張パーティ

大 萬

阿倍野区松崎町
TEL 03 5031・5032
南区豊屋町三ツ寺センター
TEL 03 9184

多鶴子 廣司 大治郎 昭夫 富久 清子 政也 征子 泰嗣 和枝 佐女 鎮也 礎山

・九 輪 水 煙・

▼あと一冊出すと新年号である。こんなことを来年の今ごろ、また同じようなことを書くことになるだろうが、

同じようなことを書けるうちはお家安泰というとか。しかし、安泰ということは「雑誌

「に」に関するかぎり、めぐりこないではないかとおもう。

▼顔を合わせると「何か新企画は」というのが編集部の場合だが、どれをとってみて

もほとんどはすでに過去にやったものばかりである。毎号

アタマの痛いことである。編集部に籍を置かきり終点のない悩みであろう。毎号おな

じようなことを言うがいい企画があればお知らせください。
(清水白柳)

・ 2 D K ・

★ことしも「はたらくうた」を特集した。テーマは古いかもしれないが、執筆陣がみなかわっている、結果的にはよみものとしては新しいのではない。

★新年号には「川柳ユーモア特集」七月号が「路郎百句」十月号は「路郎賞発表」つづいて十一月号が「はたらくうた」ということに来年もなりそうである。

★文化の月である。
★川柳紅衛兵に叱かれそう

川柳塔社の

柳箋が出来ました

サイズは本誌と同じです。ちよつとイキなスタイルです。

下部をノリづけして柳箋の下部が折れたりまがたりしないようにしたのもあります。

1冊 (50枚) 円
6 5 5
送料 3 5

だが、そのうちにピリッとしたものをお届けいたします。☆白柳氏が「霞乃先生と猫」を書かれた。ばくも十年近く

麻生家歴代のネコとおなじみなのだが、そはへくくとかツンとやるので、どのネコもぼ

くのそはへはこなかった。ある日、麻生家のネコが縁

がわでねそべっているところへ、いつも喧嘩をしかけにく

近所のネコが屋根の上からおそいかかってきた。

「不二田さん、早く来て！」とお手つだいさんの金切り声

に、ばくは二階からかけおり手近にあった長ぼうきを逆に

持つて、上になり下になりとっ組みあっているヤツをガン

ガンなぐりつけた。一びきは茶びんをひっくり返し座敷

一面水びたしにして逃げ一びきはそこにノビていた。「コ

レうちのネコですがな」と、路郎、霞乃両先生のおるすの

ときエライ失敗をやってしまったことがあった。

(不二田一三夫)

年 賀 広 告 受 付 け

あな た も！

今回から本誌発展のため、「年賀広告」にもご協力いただくよう広くお願いすることになりました。

一口二百円で左の寸法でございます。幾口でも申しこみください。

スペースの関係上、同人名簿に住所を入れておりません

川柳雑誌改題

川 柳 塔 社

振替口座大阪
三三三六八番

ので、同人の方は年賀広告をご利用いただくべし便利かとおもいます。

五分の一段が千円ですのでグループをおもちの方でもぜひご利用くださいますように。

なお、活字指定などはご一任ねがいとうございます。

★原稿締切・十一月末日・

ゼ ヒ ー 口 ！

・募 集・

本社十一月句会

日時 十一月五日(土)

会場 自安寺(妙見さん)

市電下日南下車スグ北側

(電話211・1478番)

柳 話

兼題 「略 式」

「宿 直」

「ストッパ」

「野 生」

席題 「三題(題と選者は当日発表) 各題三句

会費 百五十円

★投句だけの方は切手50円封入

若本多久志

河相すゝむ

菊田いさむ

小川恒明

菊沢小松園

選 選 選 選 選

★電話での投句や訂正はご遠慮願います

大阪市鯉谷仲之町20

川 柳 塔 社

電話 大阪 郊 3985 番

12月の兼題 「キヤリア」 「空 腹」
「隣 り」 「末 つ 子」

新年号発表(11月15日締切)

川柳塔(10句)

近作柳樽(10句)

課題吟(各題5句以内)

中島生々庵選

若本多久志選

「夢」

「酒」

「紙」

永尾永漸選

渡辺曉童選

大西八歩選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

二月号発表(12月15日締切)

川柳塔(10句)

近作柳樽(10句)

課題吟(各題5句以内)

中島生々庵選

若本多久志選

「ストロブ」

「婚 約」

「豆 子」

宮口笛生選

松川柱的選

河村日満選

★川柳塔の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

GOLDEN
O.S.K

の紳士服

スマートで
着心地のよい



株式会社
オーエスケー



定価 百二十円(送料六円)

半年分 七百五十円(送料六円)

一年分 千四百四十円(送料六円)

昭和四十二年十二月二十五日印刷

昭和四十一年十一月一日発行

大阪市南区堀江町一丁目 番地

中島蓬太郎

大岡印刷株式会社

川柳塔社

電話大阪・二二二・九八五番

札幌日神大坂・二二二・六八番

黒潮おどる 紀州路の旅



＜白浜ゆき＞ なんば発時刻

急行 第2きのくに (毎日) 12時45分発

急行 南紀3号 (毎日) 16時40分発

急行 臨時しらはま (土曜) 13時10分発

＜新宮ゆき＞ なんば発時刻

急行 南紀1号 (毎日) 7時45分発

夜行直通列車 (毎日) 22時07分発

●第2きのくに号は座席指定券を 他の列車
は座席整理券を1週間前から発売いたします

お問合わせ・南海交通社
(641) 8686 (341) 5038

南海電車

料理も電話も

551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広 東 料 理

豚饅 蓬萊 焼売

大 阪 な ん ば

◆出張販売店◆

なんば高島屋店・心齋橋そごう店・梅田阪神百貨店
天満京阪ストアー・弁天阜頭港店・中之島サン・ストアー